

# 菟道遺跡(菟道藪里14)発掘調査報告書

－大鳳寺跡西外区の発見－

2006

宇治市教育委員会

]



## 序

宇治市では、現在、「源氏物語のまちづくり」をテーマに総合的な街づくり事業に取り組んでいます。これは、宇治に残されている恵まれた文化財を核にして、歴史と文化に薫る「ふるさと宇治」の創造を目指すものです。

このような、現在の宇治のまちづくりイメージは、宇治がその舞台ともなっている平安王朝時代の文学作品『源氏物語』宇治十帖をメインシンボルとしながらも、具体的には現在に伝えられる平等院や宇治上神社などの世界文化遺産や国宝に指定される文化財があります。

しかし、このような平安時代の華やかな宇治が現在の中宇治地区を中心に展開する以前は、菟道地区が宇治の中心だったことは、この地区に所在する多数の古代遺跡が語るところです。菟道地区は、古きウジの中心でした。今回、発掘調査をしました菟道街遺跡は、この古きウジの中心集落であり、大鳳寺跡はそこに創建された古代寺院であります。大鳳寺跡はまさに古きウジのシンボルであり、聳える伽藍はそのランドマークであったことと思います。

発掘調査の成果は本書に詳しく報告したところですが、大鳳寺跡に関する付属施設が確認されたことは、古きウジを代表する古代寺院の実像解明と、この寺院を支えた古代の人たちの生き生きとした有様をさらに解明してゆく上で、とても貴重な知見であったと思います。今後は、この成果を広く発信し、歴史と文化に薫るふるさと宇治の文化の創造につなげてゆかなくてはならないと考えています。

末筆になりましたが、この発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただきました敷島住宅株式会社をはじめ関係各位に心より御礼を申し上げます。

平成18年3月

宇治市教育委員会

教育長 石田 肇

## 例　　言

1. 本書は、敷島住宅株式会社から本市教育委員会が受託して行った、京都府宇治市菟道藪里14番地における菟道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第59集にあたる。
3. 本書は、発掘調査の記録である基本的な図面と写真を図版として後半に取りまとめ、本文中の挿図と表は発掘調査成果の説明に必要な2次的な資料を主に収録することとした。
4. 本書収録の遺構図は、現地で実施したデジタル測量からの打ち出しを下図とし、整理作業によって変更を必要とした部分に修正を加えトレースによって仕上げた。
5. 本書収録遺物の実測、遺構・遺物の製図については下記のものが行った。  
杉本 宏、北澤英子、棚田裕子、西谷美紀。
6. 本書の図版に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福 滋）に撮影委託した。
7. 本書に収録する遺物・調査資料については宇治市歴史資料館がすべて保管している。
8. 本書の執筆は宇治市歴史資料館文化財保護係の杉本宏が行った。
9. 本書の編集は宇治市歴史資料館文化財保護係が担当し実務を杉本宏が行った。



宇治市の位置

## 本文目次

第Ⅰ章 序 言 .....	1
第1節 発掘調査の経過 .....	1
第2節 発掘調査の実施方法 .....	6
第Ⅱ章 菟道遺跡の歴史的環境 .....	8
第Ⅲ章 検 出 遺 構 .....	11
第1節 層 序 .....	11
第2節 検出遺構の概略 .....	12
第3節 主要遺構 .....	13
第4節 遺構の時期と性格 .....	16
第Ⅳ章 出 土 遺 物 .....	17
第1節 出土遺物の概要 .....	17
第2節 主要出土遺物 .....	17
第Ⅴ章 ま と め .....	21
抄 錄 .....	36

## 挿 図 目 次

Fig. 1 調査地の位置図 .....	3
Fig. 2 グラウンド造成前の地形図 .....	4
Fig. 3 開発計画とトレンチ配置図 .....	5
Fig. 4 宇治の推定古代地形と主要遺跡概略図 .....	9
Fig. 5 昭和54年調査トレンチ配置 .....	10
Fig. 6 大鳳寺跡出土瓦編年図 .....	21
Fig. 7 大鳳寺周辺地形と寺域推定図 .....	22

## 表 目 次

Tab. 1 遺構略号一覧表 .....	12
Tab. 2 主要遺構時期別一覧表 .....	16
Tab. 3 大鳳寺跡出土瓦型式一覧表 .....	20
Tab. 4 A トレンチ検出遺構一覧表 .....	25
Tab. 5 B トレンチ検出遺構一覧表 .....	30
Tab. 6 報告書掲載遺物一覧表 .....	32

# 第Ⅰ章 序 言

## 第1節 発掘調査の経過

### A. 本書の目的

この発掘調査報告書は、宇治市菟道藪里14番地（以後、藪里14とする）において敷島住宅株式会社が計画した宅地造成工事に先立ち、宇治市教育委員会が平成16年度に同社より委託を受けて実施した菟道遺跡発掘調査の成果を記録するものである。

### B. 届出と協議

**届出** 平成16年6月8日付で敷島住宅株式会社代表取締役川島岩太郎より、菟道遺跡に該当する宇治市菟道藪里14番他における開発行為に関して、文化財保護法57条の2の規定（旧）により届出があった。当該計画地は昭和54年に私立宇治高校の第2運動場として造成された場所である。その後、当高校は立命館宇治高校に引き継がれたが、近年の立命館宇治高校の移転に伴い、今回の宅地開発計画へと繋がったものである。

開発計画は、南北約110m、東西約125m、敷地面積9,369.22m<sup>2</sup>の台形状の運動場の一部を造成し64戸の住宅を建てようとするものである。この計画に伴う造成は、運動場の造成で周囲より高くなっている南側を切り下げ、かわって北側には盛土を行い、全体として南下りの雑壇状宅地とするものであった。切り下げの深さは最大で2mほど、盛土の最厚は4mほどが計画されていた。

届出に対する京都府教育委員会からの指導内容が通知されたのは、平成16年6月16日付であり工事前の発掘調査実施方であった。

**協議** この一連の手続きを踏まえて、本市教育委員会としては敷島住宅株式会社と記録作成のための発掘調査の実施方法について協議を行った。

当該計画地での埋蔵文化財の状況については、従前の調査から一定の様子が把握できていた。まず、昭和54年の運動場造成に伴う発掘調査では、特に東に広がる古代寺院跡の大鳳寺跡との関係究明を中心に試掘がおこなわれており、広範囲に当寺跡に関係する古瓦の散布が確認されていた。このときの工事計画では、現況の茶畠の上に盛土をして運動場を造成するものであったため、遺物の取り上げ後に埋め戻され遺構保存が図られていた。また平成6年には、西接する場所で高校の寮舎建設に伴う発掘調査を実施しており、古墳時代の埴輪窯と飛鳥・奈良時代の住居跡数棟を確認していた。

このような知見と当該地が西に延びる尾根の南斜面に相当する旧地形とを踏まえると、遺跡の展開範囲としては、大鳳寺跡に隣接する部分と尾根の上部となる北側部分が考えられた。

発掘調査範囲の協議については、開発行為の中で遺構が損壊する可能性が高い場所を中心に記録作成のための発掘を行うこととし、具体的には宅地内道路と古瓦が集中する東側の2ヵ所にトレ

ンチを設けることで合意した。予定する発掘調査面積は合計で1,800m<sup>2</sup>である。発掘調査は宇治市教育委員会が敷島住宅株式会社から発掘調査の依頼を受け、本市教育委員会が発掘責任者として実施することとなった。本件の受託契約は平成16年7月16日付で契約締結した。契約の基本内容は平成16年度に発掘作業、平成17年度に整理・報告作業をおこなう2ヵ年計画で、委託金合計5,997,000円とし、発掘作業における遺跡掘削作業及び実測作業については、敷島住宅株式会社が直接契約した発掘支援会社からの業務提供となるため、委託金に含まないものとした。

### C. 発掘調査の実施

**着手** 発掘調査の実施にあたっては、地元の菟道自治会・藪里町内会と発掘作業及び関係車両の運行に関して調整を行った後に現地調査に着手した。

現地の着手日は平成16年7月26日であり、文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知については7月29日付で行った。

**発掘箇所** 発掘箇所は、大鳳寺跡に隣接する場所に昭和54年の南北試掘溝を避けてAトレンチ(1000m<sup>2</sup>)を、尾根の上部にあたり道路敷きとなる部分に東西に長いBトレンチ(800m<sup>2</sup>)を設定した。

**発掘作業** 発掘作業はBトレンチから開始し、遺構掘削の後半段階にAトレンチの発掘へと移行した。発掘作業については、まず重機で表土及び旧茶畑の耕作土以上を排除した。廃土は場内の一角に積み上げ仮置きすることとした。表土排除後は、もっぱら人力で遺構検出のための掘削を行い、遺構検出の後に遺構掘削を引き続き行った。Aトレンチでは広い範囲の瓦溜りが発掘され、作業に手間取ったが、全体として作業は順調に進行した。現地調査の終了は平成16年10月22日であり、数日間の後片付けの後に現地を撤収した。

地区設定は、Aトレンチでは国土座標VI系に基づいて4m方眼の小地区設定を打杭し、検出する遺構や遺物の管理を行った。地区は南北を数字、東西をアルファベットで表記し、南西角で地区表記することとした。ちなみにaラインはY = -17.120のライン、1ラインはX = -122.162ラインとした。なおBトレンチは、遺構検出が少なかったため、特に地区設定を行っていない。

**記録作成** 記録作成は実測図と写真撮影でおこなった。遺構の平面実測作業にあたっては、国土調査法に基づく国土座標VI系の3級点を設け基準とした。遺構実測については、トータルステーションを用いた電子平板によって発掘遺構全体図を作成した。土層図については、トレンチ北・西壁で手測りと併に同様な方法による実測を行い記録した。実測情報はCDとして保存し、マイラーベースに50分の1でプリントアウトした。

写真撮影は、35ミリの白黒とカラーポジ、プローニーの6×7カラーポジを記録写真の基本として撮影した。また作業の進行状況の記録やメモ用として35ミリカラープリントとデジタル写真を用いた。写真的数量は35ミリの白黒アルバム2冊、35ミリカラーポジスライドケース2冊、プローニーの6×7カラーポジアルバム1冊、35ミリカラープリントアルバム1冊である。

### D. 発掘調査の現地公開

調査終盤の平成16年10月13日に報道発表を行い、16日(土)の午前10時から午後3時までに現地説明会を開催した。現地説明会は発掘調査現地オープンデーとし、作業中の発掘調査地の見学開



Fig.1 調査地の位置図（平成8年測量、10000分の1）

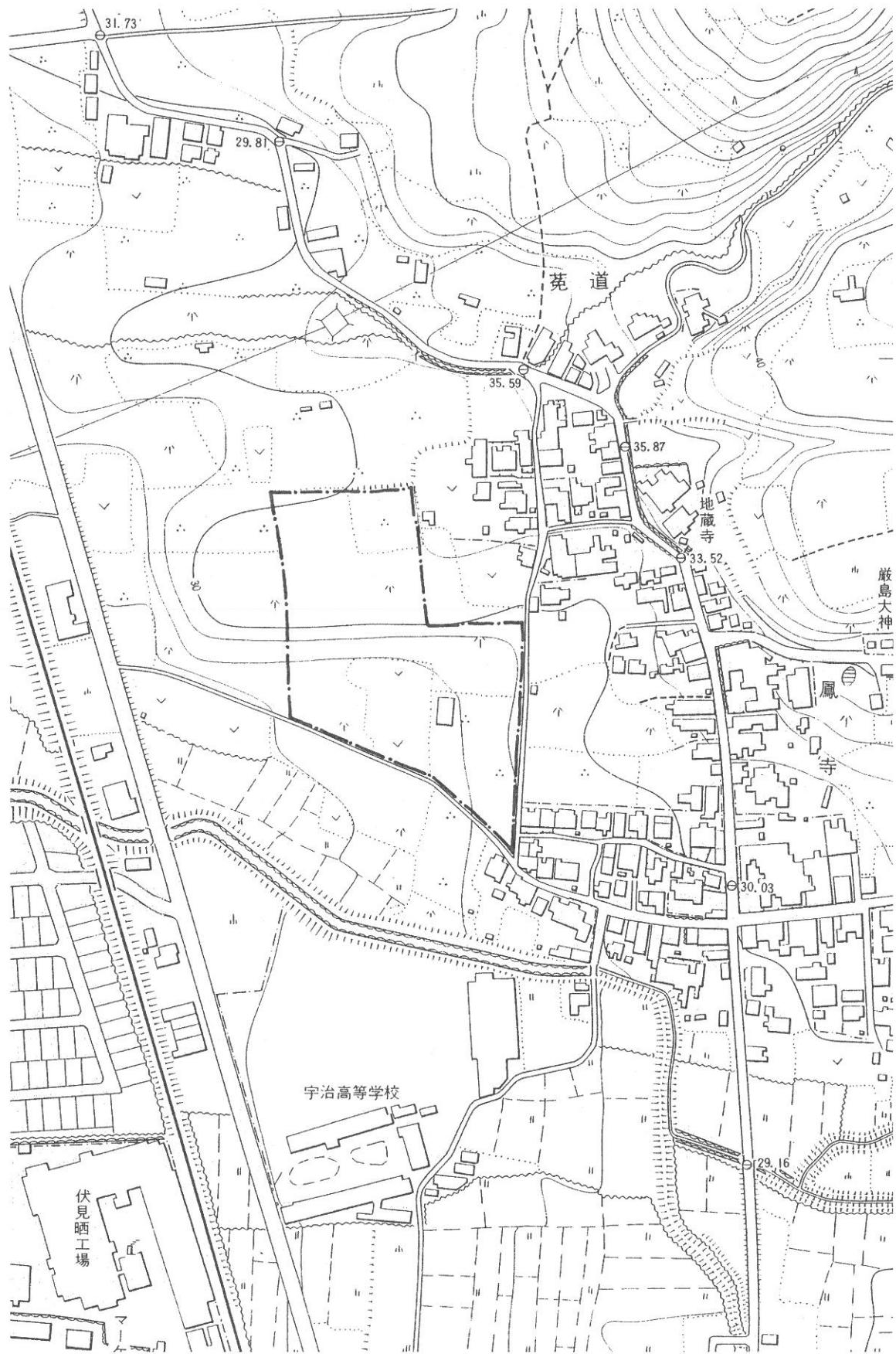


Fig.2 グランド造成前の地形図（昭和40年、3000分の1）

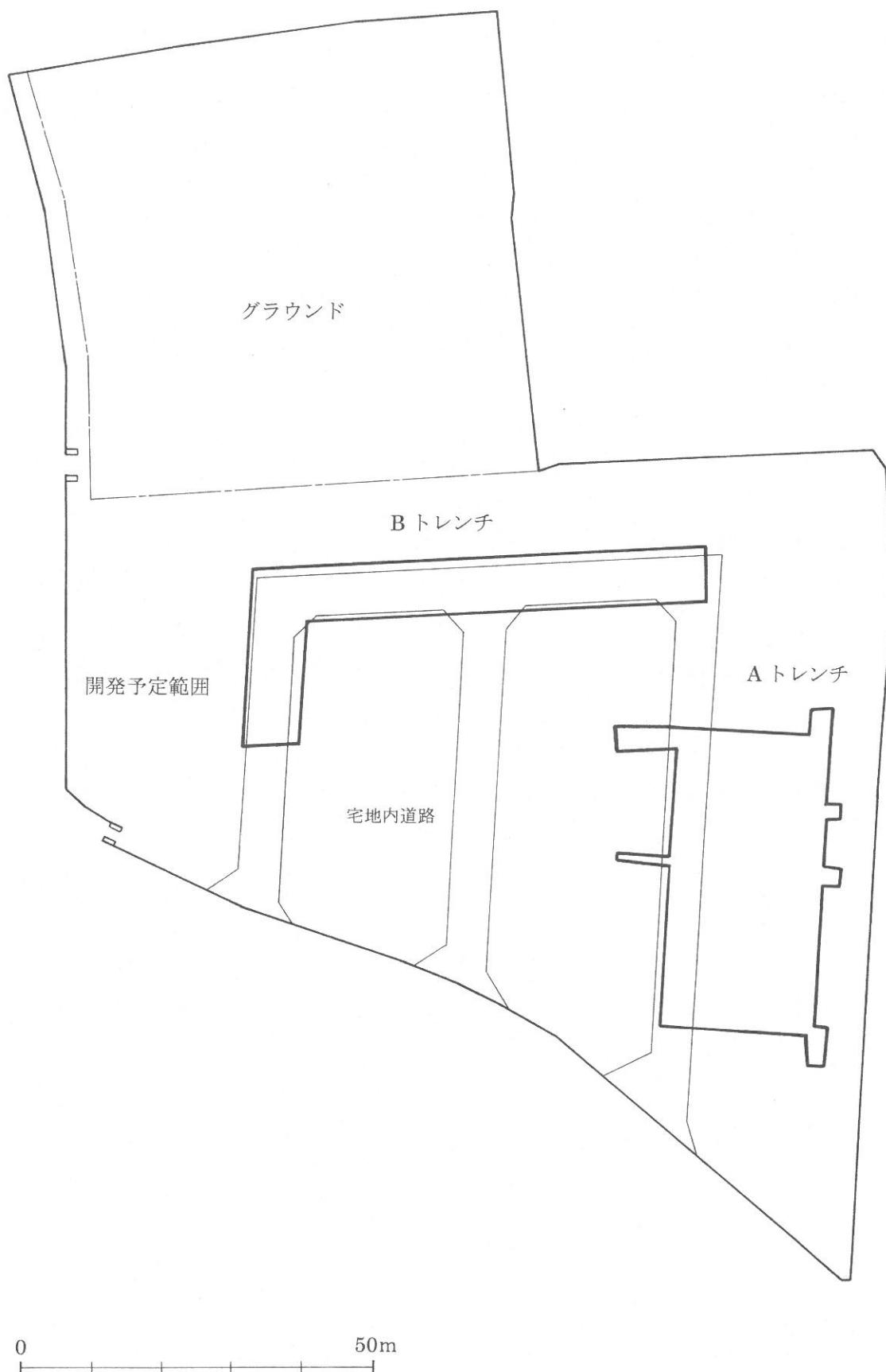


Fig.3 開発計画とトレンチ配置図

放と出土遺物の展示を行った。また、Aトレーナーの瓦溜りの取り上げについては、一般見学者の自由参加による「発掘体験」として作業を行い好評を博した。見学者は総数300名ほど、発掘体験参加者は100名ほどを数え盛況であった。

#### E. 出土品の措置

今回の発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状況でコンテナ箱に瓦と土器が100箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。

遺失物法に基づく埋蔵物発見届は平成16年10月26日付で宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管書も同日付で提出した。これら出土遺物については、平成16年11月19日付で文化財認定され京都府帰属となり、宇治市教育委員会が保管することとなった。

#### F. 発掘調査終了後の措置

発掘調査終了後は埋め戻しをせずに現地を撤収した。工事は予定通り実施され、平成17年度中に宅地造成が完成している。当該計画地に建築される集会所敷地に、発掘調査の内容を記したアルミ製説明板を宇治市歴史資料館が監修し敷島住宅株式会社が設置した。

#### G. 整理作業と報告書の作成

**整理作業** 整理作業は平成17年度に宇治市歴史資料館が直営で行った。今回の出土遺物の整理での基本は、全体の90%を占める瓦類をどの様な手続きで資料化するかであった。検出状況としては、2次移動した状態であるものが大半であることが読み取れたので、軒瓦・道具瓦をまず分別し、ついで平瓦や丸瓦については全体が窺えるものや製作手法の特徴を良く残すものを中心には選び出し、遺物実測・写真撮影の対象とすることとした。出土瓦全体の状況については、Aトレーナーの瓦溜り全出土破片の型式・角数を確認し、その傾向を把握することとした。土器類についても全体に破片度合いが高いため、遺存度が比較的高く時代的特徴を良く示す遺物で、当面の報告書作成にあたって必要であるものを選び出し図化することとした。

本報告書掲載遺物及びそれに類する遺物（A類）の量は20箱であり、全出土数量の2割ほどである。今回の整理作業では特に対象としなかったもの（B類）は約60箱となった。数量が出土時点と変わっているのは、コンテナバットへの収納のし直しの結果である。A類については歴史資料館に収納し、B類については他の出土遺物保管施設に収納することとした。

**報告書** 整理作業の後に、本発掘調査の成果品である発掘調査報告書を作成した。報告書の印刷部数は500冊である。各教育委員会、図書館、資料館あるいは文化財や考古学の専攻を持つ大学などに配布する。

## 第2節 発掘調査の実施方法

#### A. 発掘調査の実施主体

本件発掘調査は、敷島住宅株式会社の委託にもとづいて宇治市教育委員会が発掘主体者となって実施したものであり、宇治市歴史資料館が実務担当した。

### B. 発掘調査の体制

平成16年度における現地での発掘作業は宇治市歴史資料館職員が担当し、敷島住宅株式会社より直接提供を受けた下記の発掘支援会社に作業指示することにより進めた。発掘調査の体制は下記のとおりである。

#### (教育委員会)

発掘調査責任者：宇治市教育委員会	教育長	谷口道夫（平成17年10月11日まで）
	同	石田 肇（平成17年10月12日から）
専門指導：宇治市文化財保護委員会	委員長	上原真人（京都大学大学院教授）
発掘調査事務局：宇治市歴史資料館	館 長	吉水利明
	館長補佐	岡井 毅（平成16年度）
発掘担当者：歴史資料館 文化財保護係	係 長	杉本 宏（主担当）
	主 査	荒川 史
	主 事	浜中邦弘

発掘補助員等：北澤英子、久保千恵子、棚田裕子、大坪洲一郎、小川藍、宇高里恵、西谷美紀。

#### (発掘作業)

提 供 者：敷島住宅株式会社
支援会社名：文化財京都（代表工藤康弘）
発掘技術員：高山正久（日本考古学協会員）
仲道 裕（日本考古学協会員）
発掘作業員長：井領岑生
発掘作業員：のべ619名

#### (協 力 者)

本調査の実施にあたっては、菟道自治会・藪里町内会のご理解とご協力をえた。感謝する。

## 第Ⅱ章 菴道遺跡の歴史的環境

### A. 遺跡の概要

**菴道遺跡** 菴道遺跡は、宇治市菴道の平野部一帯に展開する古墳時代から室町時代にかけての集落遺跡で、東西530m、南北700mほどの範囲に遺構の展開が予測されている。現在の宇治の中心域は、宇治川左岸の宇治市街地が広がる、いわゆる「中宇治」となっている。しかしこの左岸部が開けたのは平安時代以降であり、古くは右岸域の菴道の平野部がウジの中心であったと考えられている。古墳時代前期の觀音山古墳、中期の二子山古墳、後期の門ノ前古墳など、歴代の首長墳が連綿と菴道地区の山上や平野に築造されているのはこの事情を物語る。

菴道遺跡の発掘調査は、開発対応として過去に3回程度<sup>1</sup>のまとまった面積を実施しており、ある程度の内容が明らかとなっている。現時点では、集落の形成が確認できるのは5世紀前葉である。6世紀中葉になると、後期前方後円墳の門ノ前古墳や後期群集墳の谷下り古墳群が平野部に築造されるようになる。7世紀前葉では、菴道の少し北に飛鳥豊浦寺の瓦を焼成した隼上り瓦窯<sup>2</sup>が築かれる。この頃の集落についてははっきりしない。7世紀後葉になると再び集落が形成され、遺跡北部に大鳳寺が創建されている。同じころに東側の山裾に滋賀谷須恵器窯<sup>3</sup>が築かれている。この菴道の古代集落は9世紀前葉を境に終焉に向い、13世紀になると現在の旧集落に重複する形で中世集落が成立するものと考えられている。

**大鳳寺跡** 大鳳寺跡は菴道西中に所在する7世紀後半創建の寺跡である。「大鳳寺」とするのは、江戸時代に当該場所に大鳳寺村があり、ここから大鳳寺銘の瓦が見つかったとの伝承による。大鳳寺跡については、昭和46年の宇治市史編纂に伴う試掘調査<sup>4</sup>、昭和57年から昭和61年の範囲確認調査<sup>5</sup>などが先行調査としてある。

大鳳寺跡の範囲は、西中に残る小道や土地割に概略が伝えられているが、今までの発掘調査の結果、一辺118m四方の寺域を囲む素掘り溝、寺域区画の中央西寄りに東西19m、南北16mほどで下成基壇を付設する金堂跡瓦積基壇が確認されている。金堂跡の東側に高まりが見つかっており、状況的に塔跡と想定される。伽藍型式は法起寺式が想定できる。

創建瓦は川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせで、改修瓦として奈良時代の平城宮式、平安前期の東寺系のものが出土している。この創建瓦の生産瓦窯は、宇治橋東側の二子山古墳の

1 宇治市教育委員会『菴道門ノ前古墳・菴道遺跡発掘調査報告書』1998.

2 宇治市教育委員会『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』1983.

3 宇治市教育委員会「東中遺跡・菴道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987.

4 宇治市『宇治市史』第1巻 古代の歴史と景観 1972.

5 宇治市教育委員会『大鳳寺跡発掘調査報告』1987.

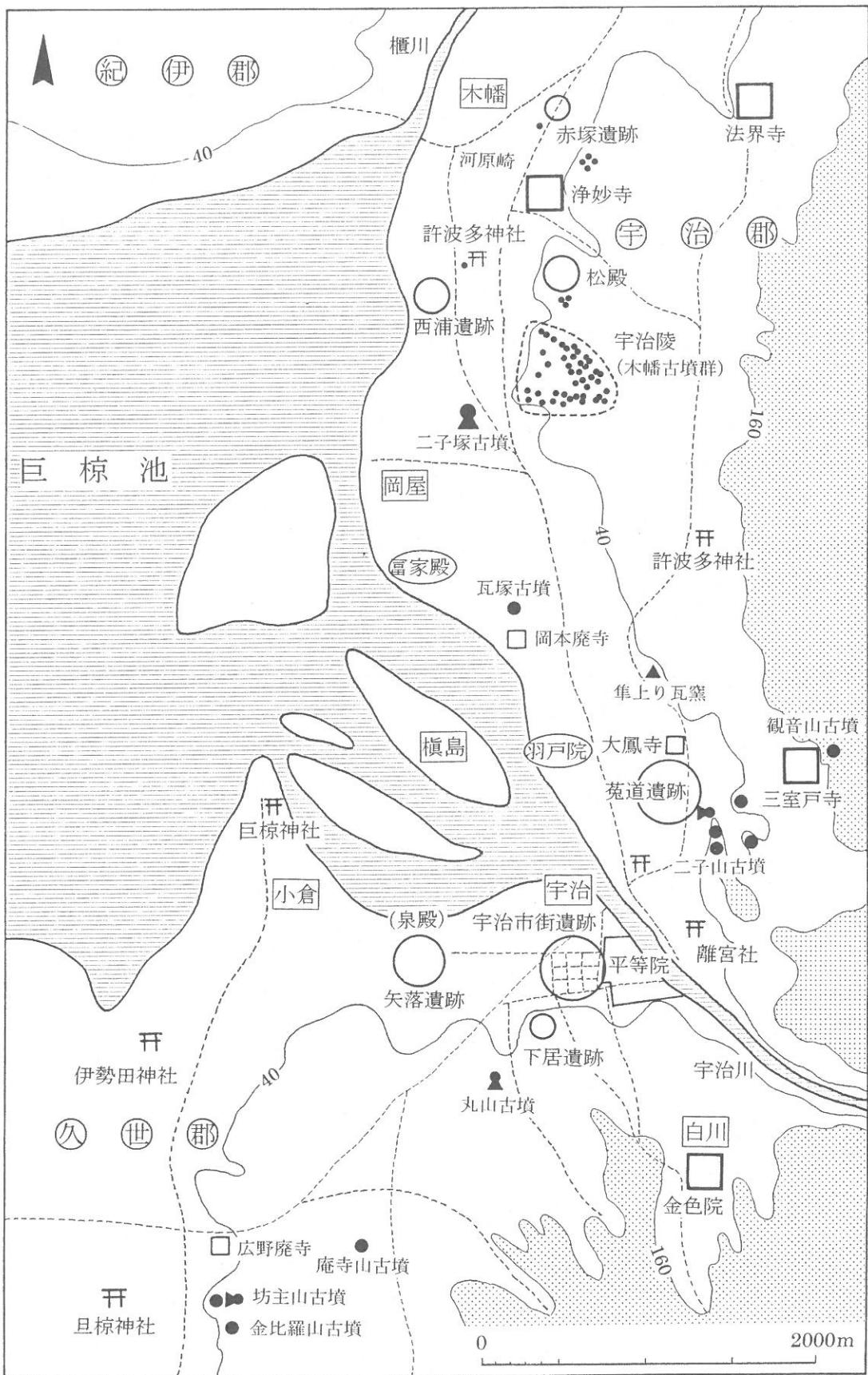


Fig.4 宇治の推定古代地形と主要遺跡概略図

存する丘陵斜面に築造された山本瓦窯<sup>6</sup>であり、昭和7年に一部の発掘が行われている。

**西隼上り遺跡** 西隼上り遺跡は、菟道遺跡の北側の低丘陵域に広がる遺跡である。飛鳥・奈良時代の集落跡で、遺跡実体としては菟道遺跡の一部と考えてよいものであるが、字名上、別遺跡として埋蔵文化財登録している。今回調査地の西隣を、平成6年に立命館宇治高校の寮建設に伴って発掘調査<sup>7</sup>している。この部分は、調査地北部を西に向かって下降する尾根の先端部にあたり、西端で6世紀初頭の埴輪窯跡、今回調査地に近い東側では7世紀後半期の掘立柱建物や竪穴住居を4棟確認している。

#### B. 調査地の概況

**調査対象地** 今回の調査地は菟道遺跡の北端にあたり、東に隣接して大鳳寺跡、西に隣接して西隼上り遺跡の埋蔵文化財包蔵地となっている。今回調査地が現況の運動場に造成されたのは昭和54年のことである。それまでは、標高30~31m程度の東西尾根頂から南に下る、標高27~22mほどの緩斜面地形であり、茶畠や竹林となっていた。この茶畠や竹林から古瓦が見つかることは、古くから地元で知られていたようである。調査地のすぐ南を小道が東西に通るが、この小道が西流する戦川の氾濫原の北岸と重なる。

今回の調査地と東隣の大鳳寺跡とは、字界の南北小道の部分で1mほどの段差を持って寺跡側が高くなっていた。運動場造成では、南下がりの旧地形の南側に擁壁を設け、標高26m程度の平坦な運動場としていた。また、尾根上方向の北側と大鳳寺側である東側部分においては、境界を垂直に画するため切土をして擁壁を構築していた。

**昭和54年の発掘** 運動場造成に伴う試掘調査として昭和54年の大鳳寺跡2次発掘調査<sup>8</sup>がある。この段階では大鳳寺跡の中心範囲は未確認であり、大鳳寺跡寄りに南北に細長いトレンチと、それに直行する3本のトレンチを設定し、大鳳寺関係遺構の追及をしている。結果的には、遺物包含層や茶畠の耕作時に搅乱された瓦層を確認し、具体的な遺構の発見には及んでいない。これは、今回の調査成果からすれば、トレンチ幅が狭く遺構確認が難しかった可能性と、やや幅広く調査した地点が偶然にも遺構の希薄部分であったことによる。出土した遺物は、大鳳寺NM01型式と同範の川原寺式軒丸瓦と重孤文軒平瓦を含むもので、現在、宇治市教育委員会で保管している。

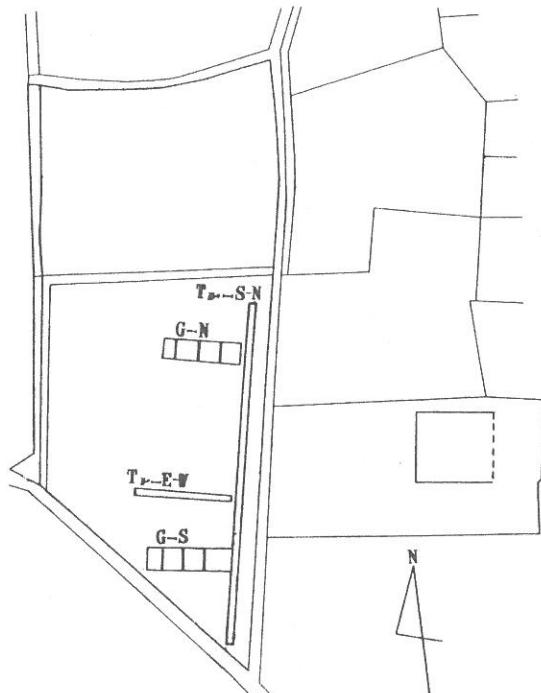


Fig.5 昭和54年調査トレンチ配置図

<sup>6</sup> 京都府「宇治古代登窯遺跡」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第14冊 1933.

<sup>7</sup> 宇治市教育委員会『西隼上り遺跡発掘調査概報』1995.

<sup>8</sup> 大鳳寺遺跡発掘調査会『大鳳寺跡第2次発掘調査報告書』1981.

## 第Ⅲ章 検出遺構

### 第1節 層序

#### A. 基本的な層序

**基本層序** 当該地の層序は各トレンチとも基本的には同じで、下層から地山となる黄褐色砂礫土を基盤層とし、その上に遺物を包含する黄褐色礫土あるいは灰褐色土が存在し、その上に旧の茶畠である近世以降の耕作土、そしてグラウンド造成時の盛土の順となっている。当該部分はグラウンド造成までは、南下がりの丘陵斜面地であった。グラウンド造成においては南側に擁壁を設け、北側の丘陵高部側に水準を合わせたグラウンド面としたため、グラウンド盛土はBトレンチ南端部で3m弱を測り、さらに南西隅では4m近くなることが理解された。

全体的な土層状況としては、中世期の造成あるいは近世以降のおそらく茶畠造成によって、特にAトレンチでは遺構面及びそれまでに形成されていた遺物包含層の多くの部分が一旦削平され、さらに現代のグラウンド造成においてこの旧茶畠耕作土層も広範囲に攪拌あるいは掘削されている様子が看取された。A・Bトレンチに認められる攪乱の大半はグラウンド造成時の廃材処分坑であり、Aトレンチで多数認められた東西方向の暗渠はグラウンドの排水用に掘削されたものである。

**基盤層** 基盤層となる地山はいわゆる洪積層であり、黄褐色系の砂質土に拳大から小指大のチャートや砂岩礫などを含む層を基本としつつ、部分的に黄色粘土やシルト層が認められるものである。土の締まりがあまく、当初は大鳳寺に関わる整地層の可能性も考えたが、無遺物層であり全体的な状況から地山と判断した。

**包含層** Aトレンチ南西部では基盤層の上に厚さ20cmほどの灰褐色土が部分的に認められた。中世期に形成された層位の低い部分のみが、茶畠造成でも削られずに残ったのであろう。

Bトレンチの黄褐色礫土の遺物包含層には瓦片は含まれず、古墳時代後期から奈良時代の土器片が比較的大破片で包含されていたため、基本的には当該期の包含層であると考えられる。またBトレンチ東端南側のやや低い部分に形成された黄褐色土を基本とする瓦を多く含む層(SX21)は、包含遺物から考えて大鳳寺創建後中世までに形成された層位であろう。

**旧茶畠耕作層** 包含層の上位に灰味を帯びた黒褐色の耕作土が存在する。この耕作土層は、近世～近代の史料を踏まえると茶畠のものであると考えられる。旧の宇治高等学校によるグラウンド造成前では、茶畠は荒廃して一部が竹藪化していた。

#### B. どの層位で遺構検出したか

上記の土層状況を踏まえ、遺構の平面的検出は基盤層を形成している地山上面で行うこととした。ただしAトレンチでは、検出面での地山の土色があいまいでかつ礫を含むため、茶

畑耕作土からの土色浸潤を受けている部分については、土色・土質判別による柱穴遺構検出が困難であった。したがって遺構の土色判別が可能なところまで地山面を削りこみ、遺構を検出することとした。

## 第2節 検出遺構の概略

### A. 遺構の表記方法

**遺構番号の変更** 遺構番号については、発掘調査中に付与した遺構番号では全体的な遺構管理に不便が生じたため、整理作業中に遺構番号と表記方法を整理し、報告に当たっては新しい表記番号を用いることとした。Aトレント200番台の遺構については、整理時の検討の中で新たに番号化したものである。また誤認等による欠番が12あるが繰上げはしていない。この旧遺構番号と新遺構番号とは遺構一覧表で対照できる。遺物の注記は旧遺構番号でされているので実見者は注意願いたい。

**表記方法** 表記方法については『発掘調査のてびき』<sup>9</sup>に準拠して、下記のような遺構の性格別アルファベット略号を用いた。表記の仕方については、「遺構性格名 + 略号 + 番号」を正式なものとし「略号 + 番号」も併用することとした。遺構番号はトレント毎の通番とした。

Tab.1 遺構略号一覧表

略号	対応遺構	備考
S A	柵、塀、築地など	柵、塀、築地などの区画施設。一定の距離をほぼ等間隔の柱間で直線的に並ぶ柱穴列を一応柵と認定する。
S B	建物	ほぼ等間隔の柱間で長方形に配置される柱穴列を掘立柱建物と認定した。全体が発掘されていない場合でも、同様に予測できる場合は掘立柱建物とした。建物の形式、性格は問わない。
S D	溝、流路など	細長く掘削された遺構を溝とした。
S E	井戸	井筒型式を問わない。
S F	道路	基本的には並行する溝の間の空間を道路と認定する。
S G	園池	人為的に掘削され整備された池状遺構を園池と認定する。
S K	土坑	井戸、溝、園池、柱穴に当てはまらない一定の大きさの掘り込みを土坑とした。
S X	性格不明遺構	柱穴及び上記の遺構に当てはまらないもの。
P	柱穴、杭跡など	柱あたりの確認できたもの、根石を持つものは当然のこととして、小型の円形掘り込みを含め柱穴とした。S Kとした小型土坑と大型柱穴との区別には、現実的に不明瞭な部分が存在することは否めない。

<sup>9</sup> 文化庁文化財保護部監修『発掘調査のてびき』 1972.

### 第3節 主要遺構

今回の発掘調査で検出した遺構は、A・Bトレンチ合計で土坑37、溝3、瓦溜り等3、柱穴82の計125遺構である。以下にトレンチ別に主要遺構について説明する。検出した全遺構の概要については遺構一覧表に掲載する。

#### A. Aトレンチの主要遺構

**遺構の全体状況（P L.4・5）** Aトレンチでは、土坑30、溝3、瓦溜り等2、柱穴69の計104遺構を確認した。柱穴の分析からは掘立柱建物3棟と柵1列が析出できている。また表面精査段階では土色変化として土坑あるいは柱跡として番号付与したが、再精査あるいは掘削過程で遺構として存在しえなかつたものが12あった。

当該トレンチの遺構検出面は、北東部で標高25.5m、南西部で25.1mほどを測り、南南西方向に傾斜角0.5%未満で緩やかに下降する平坦地である。遺構はトレンチ北半部に集まる傾向を持つ。検出面は古代当時を保つものではなく、前述した土層の様子あるいは柱穴の遺存深度から考えて、中世期と思われる耕地開発あるいは近世での茶畠造成などで、特にトレンチ東側では古代の遺構面は30cm以上削平されているのではないかと考えられる。また北半分にはグラウンドの排水用暗渠が幾条も東西に穿たれており、遺構検出に大きな障害となった。

昭和54年次の発掘トレンチらしきものが部分的に確認できたが、遺構精査のため掘り下げている途中で確認できなくなったものがあり、全体としてこの時の調査掘削が今回の調査に影響を及ぼすことはなかった。

Aトレンチでは多量に瓦が出土したものの、時代判定に有効な土器の出土が少なく、具体的な時期変遷についてやや不安な面は否定できないが、基本的には大鳳寺に関係する7世紀後半から8世紀の遺構、大鳳寺終焉後の中世期遺構、近世の茶畠に関係する遺構の3時期に区別できる。

**掘立柱建物S B 200** トレンチ北東部で検出した、P 08・21・31・46・10・24・51で構成される建物跡。南北棟で、梁行一間、桁行三間の規模で、梁行6.10m、桁行14.27mを測る。建物方位は真北より1度7分程度西に傾く。柱掘方は方形を基本とし規模も一辺1~1.5mほどある。柱跡は掘削過程で現実より大きめになってしまったが、推定直径40cmは上回るものであったと考えられる。柱が太く、柱間も広い大型の建物である。柱掘方から遺物の出土がないため時期は確定できないが、区画溝S D01と方位を合わせるため、奈良時代には存在した建物と想定できる。

**掘立柱建物S B 201** 掘立柱建物S B 200と重複する建物で、P 06・11・28・37・14・38で構成される。南北棟で、梁行一間、桁行三間、梁行6.46m、桁行14.09mを測り、S B 200と基本的に同規模のものである。柱掘方は方形を基本とし規模は一辺0.8~1mほどである。S B 200柱跡との重複関係はない。建物方位は真北より1度7分強程度西に傾く。奈良時代には存在した建物と想定してよい。

**掘立柱建物S B 202** 掘立柱建物S B 200・201と重複する建物で、P 13・26・32・50で構成される。東側がトレンチ外となるが、この部分には大鳳寺跡との境となる段差が存在するため、梁行一間、桁行三間の南北棟と推定される。建物方位は真北より4度17分程度西に傾き、S B 200・

201とやや方位を異にする。奈良時代には存在した建物と想定してよい。

**柵 S A 203** トレンチ中央部で検出した、P 59・61・63・55・52で構成される東西方向の柵。四間分、約 9 m にわたる。柱間は 2.9 から 3.4 m を測り一定しない。掘立柱建物 S B 203 と方位を同じくするものであり、奈良時代には存在した柵と想定してよい。

**溝 S D 01** トレンチ北部を東西に走る素掘りの溝。方位は真西により南に 1 度偏する。トレンチ西端で南に直角に折れる。東西方向の溝幅は約 2 m、南北部分はそれより広い。溝底の標高から西へ排水していることが理解できる。溝の西側で小石が集まり、高さ 30 cm 程度の堰状になった部分があった。埋土より飛鳥後期の須恵器壺や甕体部片、格子叩きの平瓦片が整理箱 1 箱ほど出土している。

**溝 S D 81** トレンチ南部を東西に走る、断面「U」字形の素掘り溝。方位は S D 01 に類する。層位的には近世の茶畠耕作土を掘り込んでおり、またグラウンド造成前の地形図には見えない土地割りであるため、近世の地割溝と判断できるものである。

**溝 S D 109** トレンチ北西部で検出した、鍵手状の素掘り溝。溝の幅は 70 cm から 1 m を測る。方位は S D 01 より東に偏している。層位的には瓦溜り S X 204 の下層に存在する。出土遺物が少なく年代がはっきりしない。奈良以前の遺構である。

**土坑 S K 23** 掘立柱建物 S B 200・201 と重複する楕円形土坑。長軸で約 1.6 m。埋土には大鳳寺創建時の軒丸瓦や鬼瓦などを含む瓦片や奈良時代の須恵器片などが整理箱に 1 箱程度含まれていた。廃棄土坑と考えられる。奈良時代から平安時代。

**土坑 S K 39** トレンチ中央で検出した一辺 3.3 m ほどの方形土坑。南東部が張り出しが、柱穴の重複を判別できなかった可能性が高い。埋土からかわらけ、龍泉窯青磁碗、瓦質羽釜などの破片が出土している。13世紀の年代を考えられる。廃棄土坑。

**土坑 S K 100** トレンチ南西で検出した一辺 2 m ほどの方形土坑。埋土からかわらけ、東播系片口鉢、白磁などの破片や大鳳寺創建期の軒丸瓦当などの古瓦片が整理箱に 1 箱程度含まれていた。廃棄土坑と考えられる。年代的には12世紀後半ころに比定できる。

**土坑 S K 108** トレンチ南東で検出した長軸が 1.5 m ほどの楕円形土坑。埋土からはかわらけ、瓦質鍋、龍泉窯系青磁碗や水差の破片が整理箱に 1 箱程度出土した。廃棄土坑と考えられる。年代的には13世紀ころに比定できる。

**瓦溜り S X 204** トレンチ北西で検出した、南北 15 m、東西 12 m ほどの範囲に広がる瓦溜り。層厚は 5 ~ 15 cm ほどで、瓦で 2 枚程度の重複である。瓦破片は 15 cm 程度に破片化したものが目立った。層位的には地山直上で近世の茶畠耕作土下である。層位と破片のあり方から考えて、瓦葺建物が当該位置に存在した 1 次的痕跡を示す瓦溜りではなく、瓦の 2 次移動の結果としての瓦溜りと考えられる。おそらくは中世段階での当該部分の耕作地開発に伴って、付近から集められた瓦片であると考えられ、瓦溜りの端が鍵形に屈曲するのは耕作地との関係と思われる。

当該部分から出土した瓦破片はコンテナバットで 80 箱程である。この中の平瓦の角数を数えると 319 点である。一枚あたり角は四カ所であるため計算上 80 枚分 (79.75) の平瓦を想定することができる。この計算想定枚数で平瓦出土数 6604 枚を割ると、1 枚あたり 82.55 片に破片化している計

算となる。これを破片大に直すと3.5cm角程度となり、当該遺構の一般的な破片の大きさに比べると極端に小さいものに計算される。平瓦の角数と出土破片の状況は全く整合せず、瓦溜りS X204の状況は瓦建物から落下した状態からは遠いとしてよい。

**区画S X204** 瓦溜りS X204と重複する、瓦片で長方形に区画した遺構で、南北2.6m、東西8.4m程度である。区画の様子が比較的よく理解できたのは東辺である。他の部分は、所々に瓦が線条に並ぶことが確認できた程度である。

この区画遺構は、平瓦の大破片を地山上に凸面を上して線状に置き並べたもので、瓦が基壇状に複数枚重なることもないし区画の内側も特に注意すべき変化はない。当初は瓦溜りS X204と関係する建物基壇かと考えたが、基本的にはS X204が形作られていく直前段階に、瓦破片を用いて簡単に設けられた中世の耕作に関わる区画であると考えられる。

#### B. Bトレーニングの主要遺構

**遺構の全体状況（P L.6）** Bトレーニングでは、土坑7、瓦溜り1、柱穴13の計21遺構を確認した。遺構掘削過程で遺構として存在できなかったものが1ヵ所あった。またトレーニング西端で南北溝が確認できたが、これは造成前の茶畠に關係する耕作溝である。

当該トレーニングは基本的西に伸びる丘陵の南斜面部に当たっており、トレーニング北端沿いでおそらく斜面部途中の棚状地形と思われる緩斜面を確認している。遺構の多くはこの緩斜面上に存在する。遺構は散漫でまとまりがない。これは調査地点の問題かと思われる。トレーニング西端では斜面を南に追跡しつつ掘削を行ったが、深さが2.5mを超え掘削壁面の崩壊が危惧されたため、追求を断念した。この斜面部確認の中では目立った遺構・遺物の検出はなかった。遺物的には歴史時代に所属するものが大鳳寺寄りの東部に多く、古墳時代後期の遺物は西側で目立つ傾向にある。なお、遺構番号はトレーニングごとの通番となっている。

**土坑S K09** トレーニング中ほどで検出した、東西1.2m、南北0.9mほどの方形土坑。埋土に炭が混じり、壁面は焼けて赤褐色となっている。いわゆる焼土坑である。遺物を含まず時期不明。

**土坑S K17** トレーニング中ほどで検出した、東西1m、南北0.7mほどの方形土坑。拳大の礫によって土坑が中央辺りで東西に仕切られているような状況であった。性格不明。埋土からは古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器片が出土した。奈良時代。

**瓦溜りS X21** トレーニング東端で検出した、東西9m、南北4m以上の瓦溜り。余り密な状況で瓦があるわけではなく、斜面部に堆積する黄褐色土の展開範囲の中でも、ここだけに目立つように瓦が含まれている状況である。性格的には包含層に近いであろう。ここから整理箱8箱分の軒瓦を含む瓦片が出土している。土器としては古墳時代後期から奈良時代の須恵器や弥生土器の底部が出土している。

**土坑S K22** 瓦溜りS X21と重複する土坑。トレーニングの南壁土層でS X21を掘り込んでいる状況を確認できたもので、平面的な範囲は確認していない。ただ瓦の接合範囲を考えると、南壁から北へ2.5m程度は広がるものと考えられる。遺物については、調査状況から大半が瓦溜りS X21に含まれてしまっていると考えられる。

## 第4節 遺構の時期と性格

**遺構の4時期** 前節で概述したことを整理すると下記の一覧表にまとめることができる。遺構・遺物から確認できる時期は大きく4時期となる。まず古墳時代後期。年代的には6世紀末から7世紀前半にかけてであり、Bトレンチを中心に須恵器片が出土している。遺構ははっきりしないが、Bトレンチの柱跡のいくつかは当該期に該当しよう。

中心となるのは飛鳥時代後期から奈良時代あるいは平安時代前期にかけての時期で、建物跡や区画溝などの主要遺構が存在する。多量に出土した瓦はこの時期に所属しており、隣接する大鳳寺跡と同類のものである。大鳳寺に関係する施設が存続した時期である。年代を遺物から想定すれば7世紀後半から9世紀ころが妥当である。

次が中世期であり、土器からは12世紀後半から15世紀にかけてである。遺構は土坑を主体としており、Aトレンチの瓦溜りも当該時期の開墾に伴って形成されたと考えられる。遺構と遺物からは、大鳳寺関係施設が廃絶した後の状態として把握でき、集落周辺での耕作地が想定できる。

近世については、遺構としては溝跡がある。耕作に伴う区画溝であろう。関係資料からは当該時期には茶畠であったらしい。

Tab.2 主要遺構時期別一覧表

時代	建物他	溝	土坑他	遺物	備考
古墳時代後期				Bトレで須恵器片散見。	遺構がはっきりしない。
飛鳥後期から奈良時代	A-S B200、S B201、S B202 A-S A203	A-S D01、S D109?	A-S K23、S K58、S K78、S K91 B-P 03、S K17	須恵器片。大鳳寺と同様の軒瓦などの古瓦多数。	掘立柱建物や区画溝。大鳳寺関係遺構としてよい。
中世			A-S K30、S K39、S K47、S K88、S K100、S K108、S X204、S X205 B-S X21、S K22	かわらけ、瓦器椀、瓦質羽釜・鍋、東播系ねり鉢、青磁・白磁など。	小柱穴や土坑、瓦の2次堆積など。集落周囲の耕作地の可能性が高い。
近世		A-S D81		近世陶磁器。	茶畠。

## 第IV章 出土遺物

### 第1節 出土遺物の概要

#### A. 出土遺物の概要

今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、出土時点においてコンテナバットに100箱である。種類としては土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦、その他である。有機質の出土遺物は基本的ではない。主体を占めるのは瓦であり、ついで須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器、石器の順である。瓦はコンテナバットに95箱程度である。時代としては、飛鳥後期（白鳳期）から奈良時代に所属するものが圧倒的であり、瓦がその中心である。土器では中世期のものが目立ち、ついで奈良時代と古墳時代後期のものが同じ程度となっている。奈良時代・古墳時代後期の土器は総量でもコンテナバットに数箱程度である。

遺物のうち特に瓦はAトレーナーの瓦溜りS X204から大半が出土し、次いでBトレーナーS X21、また近世耕作土や包含層からも目立つ程度に出土した。柱穴や土坑では、Aトレーナー土坑S K100やS K108などから一定量の遺物の出土があったが、大半は小破片の少量出土か遺物を含まない状況であった。遺物の遺存状態自体は、風化・摩滅などがわりあいと進んでおり、特に土師器や軟質の瓦では製作技法や使用の痕跡を留めないものも多い。

#### B. 報告する遺物の選択

出土遺物の報告書掲載にあたっては、遺構の時期や性格を判断する上で重要なものの、時期的特徴を示すものを基準に選択した。

具体的には、主体を占める瓦類においては、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などの道具瓦については小片で図化が難しいもの以外は全て掲載に努め、平瓦・丸瓦については、遺存状況を基本に型式や製作技法の特徴を留めるものを選び出し掲載することとした。平瓦・丸瓦の型式別の出土割合については、瓦溜りS X204出土瓦全点について調べ傾向を示した。

土器類については出土量が少なく、かつ全体的に破片化が進んでおり図示できるものが少ないが、遺跡の時期を示す上で必要と思われるものを選び出し掲載した。

掲載した瓦類は図示したもの56点、写真のみの掲載が2点の計58点、土器類は17点、石器が1点の合計76点である。

### 第2節 主要出土遺物

以下に、主要な出土遺物について、瓦類、土器類、石器の順で説明する。瓦類については、全体的な状況を概説した後、主要出土遺構ごとの状況を説明する。

## A. 瓦類

瓦類としては、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦の種類がある。瓦の遺存状態は全体に破片化が進んでいる。以下に種類別の概要を説明する。また、型式については大鳳寺跡における瓦型式<sup>10</sup>を援用しつつ、新たなものについては型式を追加して説明する。

**軒丸瓦（P L.7）** 軒丸瓦は2型式21点が出土している。出土場所は瓦溜りS X204から18点、他は各遺構からである。比較的大きな瓦当破片は2個体のみで、他は小片である。

今回出土した軒丸瓦21個体中の20個体（1～3、5～13）が大鳳寺の創建瓦であるNM01と同範と見てよいものである。NM01は大和川原寺式のモチーフを忠実に模したもので、中房蓮子に乳環がないこと、外縁内側が凸線ではなく凹むこと、外縁面違鋸歯文が粗雑で正式な面違にならない点で粗形と違いを見せる。瓦当直径20cm程度。7世紀後半の年代観が想定できる。大鳳寺の創建軒丸瓦はこの1型式のみである。このためNM01は、範傷の少ないものからかなり傷が進んだものまで存在する。大鳳寺跡では、当初の製作瓦が金堂部分に集中し、範傷が進んだものが北限区画溝から出土している。今回出土したものには範傷が進行しているものが多く認められる。

また大鳳寺NM06と同範と考えてよいものが1個体（4）出土している。NM06は単弁12弁蓮華文を主文とし、小さな中房に1+4の蓮子を配するもので、他の遺跡に同範例はない。平安前期頃のものであると考えられる。

**軒平瓦（P L.8～11、20・21）** 軒平瓦はすべて型引きの重弧文で42点が出土している。出土場所は瓦溜りS X204から37点、BトレーナーSK22から2点、他は各遺構からである。

大鳳寺跡の創建軒平瓦は型引き重弧文のNH01であり、川原寺式軒丸瓦NM01と組み合うものである。四重弧文と五重弧文とがある。五重弧文が主体である。今回は四重弧文のみ出土しており中心寺域と違いを見せてている。

型式名については、四重弧文をNH01A、五重弧文をNH01Bとした。NH01Aの瓦当面を観察すると、重弧文の形状によりa～eの5種類に分類できた。すなわち、弧文の断面が台形で角が丸みを帯びるa（17、18、20、21、26～29）、弧文の角が鋭いb（15、19、22、34、52、53）、弧文の上下各一条が太いc（16）、弧文が浅いd（33）、断面が三角形のe（23、24、31、35）である。引き型としてはaとbは同一型の新旧である可能性は高い。割合としてはaとbで全体の7割、他はc・eあるいは不明であり、dは1点のみである。

NH01Aの作り方は、桶に粘土板を巻きつけた後、おそらく上半分を少し叩き締めた後に桶下端（広端）に細身の粘土板を巻いて顎とし、さらに顎以外の叩き締めと顎の回転ナデを行い、桶から取り出し施文の後に四分割したものと考えられる。19・20・53などからはその様子を窺うことができる。凹面は桶模骨痕の凸部を縦にヘラケズリし平滑に仕上げるものが多い。

平瓦との関係は後述する平瓦HAと対応する。詳しくはNH01AaとNH01Abが平瓦HAcと対応し、NH01Aaと平瓦HAbとの対応関係が1個体（16）で確認できる。NH01AaとNH01Ab

<sup>10</sup> 宇治市教育委員会『大鳳寺跡発掘調査報告』1987.

bの凸面は平瓦H A cがそうであるようにわりあいと雑な叩き跡を残すものが多く、15・52は凹面の分割界線を無視して四分割している。N H01A aとN H01A bは軒平瓦N H01系の中で最も後出するものと考えられる。

**鬼瓦（P L.7）** 鬼面文の鬼瓦の破片が1点（14）AトレンチSK23から出土している。鬼瓦OG03とした。鬼面右側の口の部分で、開いた口と牙が認められる。外縁には火炎状の珠文が認められる。推定高が30cm未満の小型の鬼瓦である。同文のものが以前に瓦研究家の木村捷三郎氏によって大鳳寺跡から採集<sup>11</sup>されている。奈良時代から平安前期か。

**丸瓦（P L.12）** 丸瓦で確認できるものは全て行基式（大鳳寺丸瓦MA）である。大鳳寺跡では玉縁式（大鳳寺丸瓦MB）も確認されているが、今回は出土していない。丸瓦MAは凸面を丁寧なナデ調整しており、成形時の叩き痕跡をとどめていない。また38は回転ナデの痕跡をよく留める個体である。

**平瓦（P L.13～19、22）** 平瓦は凸面の成形・調整痕跡によって、格子叩きを残す平瓦H Aと繩叩きを残す平瓦H Bとに大きく二分できる。平瓦H Aは叩きの格子の大きさによってH A a～H A cの3種類に分けることができる。

H A a（54）の格子は一辺0.5～0.8cmほどの細かいもの、H A b（39、41、44）は一辺1cm程度の斜格子のもの、H A c（40、42～46、56）は1～1.5cmほどの粗いものである。叩き密度もH A cは全般に粗く、また須恵質に硬く焼成され歪みが生じているものが目立つ。これは軒平瓦N H01A aとN H01A bにも認められる傾向である。また叩き痕跡にはaとbが同一個体に共存（49）するものもわずかであるが認められる。内面は桶模骨痕の凸部を縦にヘラケズリし平滑に仕上げるものが多い。

また、これらには凹面に分割界線（15・39・41・45・52）や粘土板接合痕跡（18）あるいは布の綴じ合わせ（15・53・55）、側面に分割破面（46・53）が観察される個体が含まれ、桶巻作りであることがわかる。

平瓦H Bは、一枚作りの平瓦H B a（50、51）と桶巻作りの平瓦H B b（47）とに分けられる。後者は1点のみの出土である。

**瓦溜りS X204出土瓦** 今回出土した瓦総量の4分の3程度が集中した瓦溜りS X204の瓦組成についてまとめておく。前述したように、出土した瓦の量は軒丸瓦が19点、軒平瓦が40点、平瓦が6604点、丸瓦が1145点の合計7808点である。定量的に傾向が読み取りやすいのは平瓦であるため、この全点集計を行った。結果は平瓦H Aが2925点、平瓦H Bが1136点、不明が2543点となっている。不明が多いが、これは全体に風化が進んでいることが影響している。

さて内容を詳しく見ると平瓦H AはH A aが145点、H A bが211点、H A cが2592点となり圧倒的にH A cが優勢であること理解できる。これを分かりやすくパーセントに直すと、型式判明の4061点中平瓦H Aは72%を占め、H A cにしても64%の占有率となる。すなわち瓦溜りS X204

<sup>11</sup> 星野猷二・宇佐晋一『器瓦録想』伏見城研究会 2004.

の平瓦は H A c を主体とするもので、軒平瓦では N H 01A a と N H 01A b が主体となる傾向と整合することがわかる。大鳳寺金堂部分をはじめ中心寺域部分の出土瓦の特に創建期瓦の状況については、軒平瓦は N H 01B 、平瓦も H A a ・ H A b が多い点で、S X 204 の状況と異なる。

#### B. 土器類、石器類

土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器などがコンテナに 5 箱程度出土しているが、大半は破片化したもので図化できるものは少ない。P L.23 に示したものはその中でかろうじて図化可能であったものである。詳細は一覧表に譲る。また B トレンチ掘削中にサヌカイトの剥片石器（74）が 1 点出土している。

Tab.3 大鳳寺跡出土瓦型式一覧表

種類	型式	内 容	備 考
軒丸瓦	N M01	複弁八弁蓮華文。蓮子1+5+9。川原寺式。範傷が進んだものもあり。	山本瓦窯に同范。創建瓦。飛鳥後期。
軒丸瓦	N M02	単弁十六弁蓮華文。平城宮6133-Hと同范。	平城Ⅲ期。
軒丸瓦	N M03	複弁八弁蓮華文。平城宮6225系	平城Ⅲ期。
軒丸瓦	N M04	複弁八弁蓮華文。平城宮6282系	平城Ⅲ期。
軒丸瓦	N M05	複弁八弁蓮華文。中房に「大伴」。	平安前期。東寺、広隆寺等に類例。
軒丸瓦	N M06	単弁十二弁蓮華文。蓮子1+4。	平安前期か。類例なし。
軒丸瓦	N M07	複弁八弁蓮華文。西賀茂瓦窯 N S 151 系。	平安前期。
軒丸瓦	N H 01A	四重弧文。段顎。引き型により a から e に細分可。	創建瓦。西外区の主要型式。飛鳥後期。
軒丸瓦	N H 01B	五重弧文。段顎。	創建瓦。中心寺域の主要型式。飛鳥後期。
軒丸瓦	N H 02	均整唐草文。平城宮6663-Cと同范。平城宮6225系と組み合う。曲線顎。	平城Ⅲ期。
軒丸瓦	N H 03	均整唐草文。西賀茂瓦窯 N S 20 と同范。曲線顎。	平安前期。
軒丸瓦	N H 04	ヘラ描き重弧文。曲線顎。	
丸瓦	M A	行基式。	飛鳥後期。
丸瓦	M B	玉縁式。	奈良・平安期。
平瓦	H A	凸面に格子叩きを持つもの。格子の大きさで細かい a から粗い c まで 3 細分。桶巻造り。	飛鳥後期。
平瓦	H B	凸面に繩叩きを持つもの。一枚造りの a と桶巻造りの b とに細分。	奈良・平安期。
鬼瓦	O G 01	単弁八弁文蓮華。剣菱形の間弁。	飛鳥後期。
鬼瓦	O G 02	幾何学文。	飛鳥後期。
鬼瓦	O G 03	鬼面文。	奈良・平安期。

## 第V章 まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代後期のおそらく集落に関係する遺構・遺物、ついで飛鳥時代後期から奈良時代に至る大鳳寺関係の遺構・遺物、そして中世期以降の大鳳寺廃絶後の開墾に伴うおそらく耕作地という順序で、当該地の歴史的変遷が把握できることは前述したとおりである。ここでは中心的な発掘遺構である大鳳寺関係遺構の構造と性格と、その後について整理しまとめたい。

### A. 大鳳寺西外区の発見

**大鳳寺中心寺域** 大鳳寺中心寺域は、今までの調査でその範囲と中心堂塔の位置が概ね明らかとなっている。その調査成果については、P.L.2に今回の調査地を含め地形図を示した。この図をもとに、大鳳寺周辺の旧地形と区画溝、そして主要建物の位置を復元的に書き直したものがFig.6である。これを見ると理解できるように、大鳳寺は西へ下降する緩斜面に占地しており、南に隣接して小河川戦川の氾濫原が存在する。中心寺域と西外区との間には一段高い直線的な崖状の段差が存在し、両者が隔てられていることが分かる。ただしこの段差については前述したとおり、寺院廃絶後の開墾等の削平によって現況のようにより明瞭化した可能性が高い。

さて、大鳳寺中心寺域の四周を区画する施設については、南側が二重の素掘り溝、東・西・北側が幅2.5mほどの素掘り溝であることが分かっている。南側は築地の可能性もあるが、溝の間は5mを測りやや広い。どの辺とも区画溝の中からは瓦類が出土はするがさほど多いわけではなく、量的に瓦葺築地等の施設が構築されていた状況は想定したい。これらの区画溝から復元できる範囲は、真北を指向する扁台形状寺域となり、一辺は概ね118mに計算できる。南辺には参道を思わせる地割があり、この延長線上の戦川氾濫原では以前に渡り堤状遺構<sup>12</sup>が確認されている。

中心伽藍は中心寺域の南西にやや寄って配置される。金堂跡は東西19.2m、南北16.1mの瓦積基壇で、南北辺に犬走が付設されている。金堂跡の東に高まりが確認されており塔跡が想定できる。

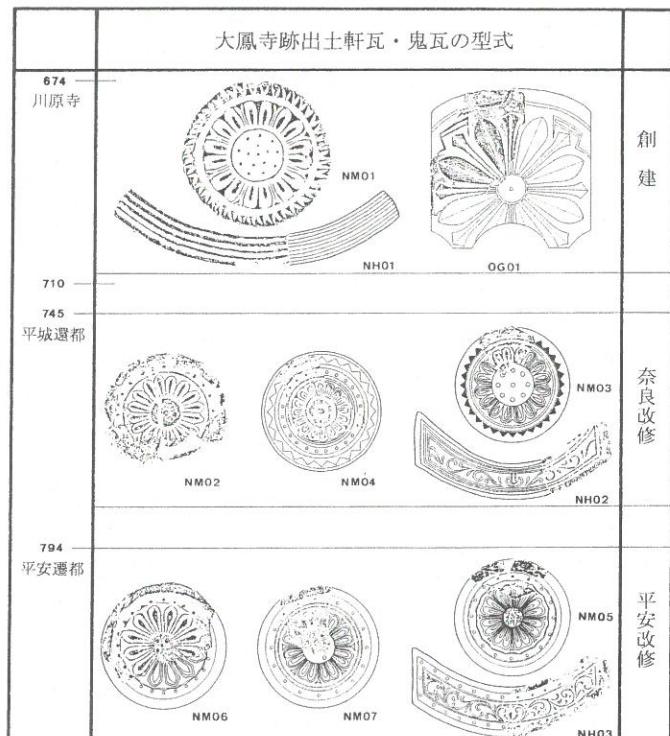


Fig.6 大鳳寺跡出土瓦編年図（報告書に一部加筆）

<sup>12</sup> 宇治市教育委員会『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』1998.

**西外区** 今回、Aトレンチで確認した溝S D01と建物S B200～203などの概ね真北を基準に設定された一連の遺構は、場所・時代・遺物の共通性から大鳳寺の中心寺域の西に接して設けられた付属区画と考えられる。この区画を「西外区」と呼んでおく。

西外区は中心寺域の西側にわずかに残った緩傾斜地を利用し、幅2mほどの素掘り溝で方形に区画したものであり、範囲は東西が40mほど、西外区の南辺を区切る施設は未確認であるが、地形から考えて南北長は40m以上50m未満に推定可能である。

**西外区の空間構造** 西外区内の主要施設は、東北角に南北棟の大型掘立柱建物が1棟である。後世の削平で消滅した建物があったかも知れないが、削平の度合いから掘立柱建物ならばずいぶん小規模のものであったと考えられる。掘立柱建物の西隣に北に開くおそらく方形溝であろうS D109がある。方位が他と若干ずれるのが気にはなるが、同時期遺構と思われる。この上層に瓦溜りS X204が重なるが、S D109からはほとんど遺物が出土せず、方形溝内に瓦を使用した施設、例えば小堂などがあったとは考え難い。また比較的しっかりした柱跡でありながら、建物としてまとまらないものが掘立柱建物とS D109との間に集中する傾向も気にかかる。柱跡から遺物の出土がなく時期は不明ではあるが、土地利用の変遷からすれば、このような大型方形柱穴は西外区

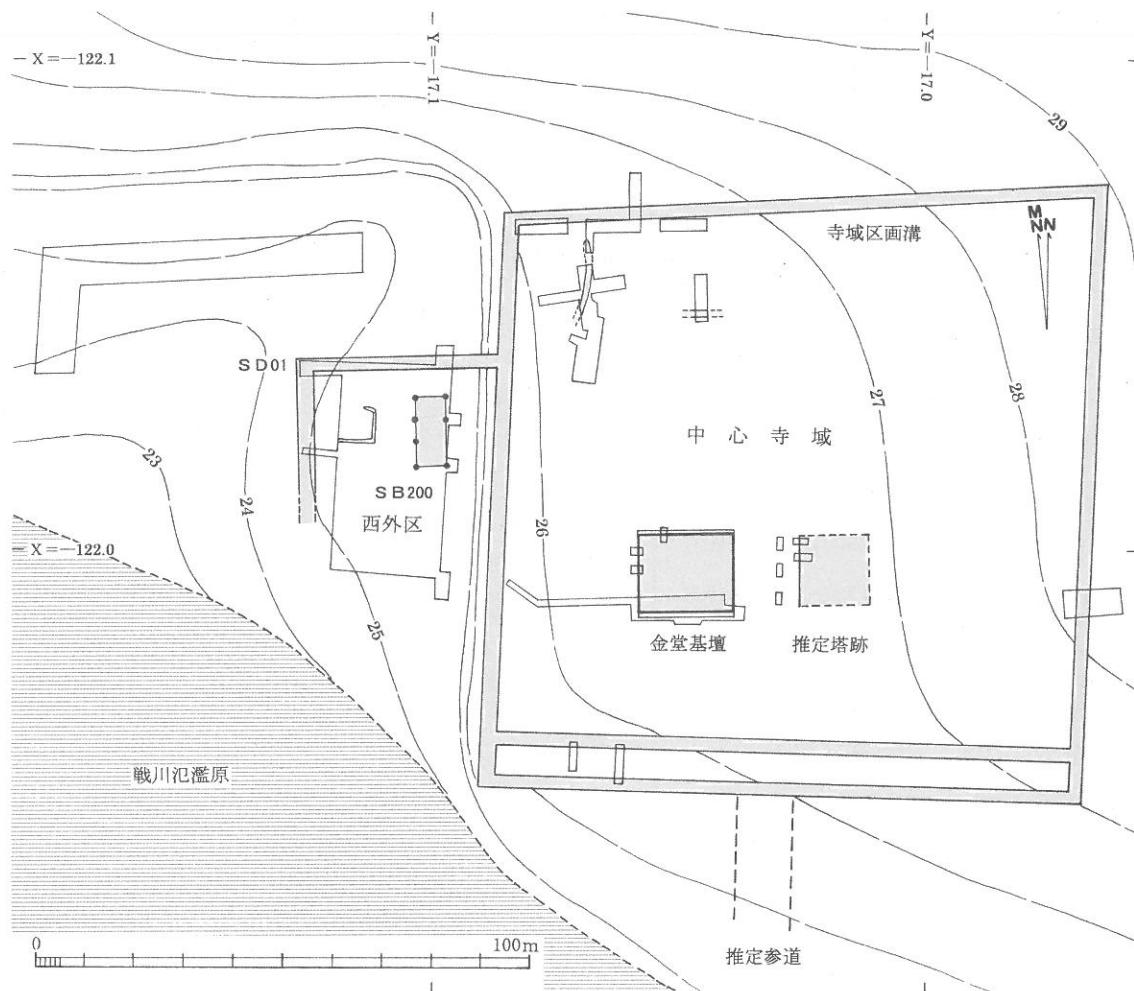


Fig.7 大鳳寺周辺地形と寺域推定図

の時期に比定するのが自然であり、西外区は全体的に遺構が希薄であるなかでは、これらの柱跡も当時の何かしらの施設を示していると考えるべきであろう。いずれにしろこの柱穴や S D 109の小区画を含め、西外区内の施設は北半分に偏る。

南半分では、奈良時代に所属するものとして、方形の大型廃棄土坑 S K 78 と S K 91 に注意したい。両土坑とも土器などの遺物量は多くはないが、土師器の壺や甕あるいは須恵器甕などの生活容器片が含まれている。奈良期の土坑では他に掘立柱建物に重なる S K 23 と建物の南に接する S K 58があるが、前者は瓦を多く含むもので土器主体の他とは異なる。S K 58は不整円形で小さい。すなわち南半分は基本的に広場や耕作地などを想定に含む空閑地となっており、生活廃棄物を処理する大型土坑が計画的に設けられていた状況を想定できる。

**西外区の性格** 西外区の大型掘立柱建物である S B 200・201・202 の 3 棟は、同じ場所で建て替えられているが、柱掘方の重複関係がなく相互の前後関係は不明である。S B 200 と S B 201 はほぼ同規模・同じ間取りで、建て替え位置もほぼ同じなのに対し、S B 202 は同じ間取りで規模を縮小化し、場所と方位を少し違えている。建物の順番は、柱掘方が大きく比較的そろっている S B 200 が最初で、次いで S B 201、最後に S B 202 であったのではないかと想定する。また S B 200 の桁行柱間はわりと規則的で、南北の端間がほぼ等しい。尺に直すと端間は 14.5 尺、中間が 13.5 尺見当に見積もられ、梁行は 20 尺見当と考えられる。

瓦溜り S X 204 の瓦類であるが、この使用建物は S B 200・201・202 である可能性が高い。これは前述したように、中心寺域区画溝の様子からすれば大鳳寺の寺域区画には瓦葺施設は想定できず、西外区の区画溝 S D 01 でも同様であること。また溝 S D 109 の小区画でも瓦葺施設の想定はし難いことによる。消去法による想定である。状況証拠的には、これらの建物はいずれも柱間が広く、柱当りから考えても比較的太い部材を使用した建物が想定でき、瓦葺に耐えうる構造的耐久性は十分ではないかと考えられる。

さて、このような西外区の状況からだけでは、当該施設の性格を確定するには至らないが、一般的な想定としては「僧房」を念頭に置いた寺院運営に係る生活空間を思い描くのが自然かと考える。掘立柱建物 S B 200 の柱間からは、中央の通路空間と両側にそれぞれ房室を想定してもよい。瓦から見れば、西外区が構えられたのは大鳳寺創建工事の中でも最終盤であり、奈良時代から平安前期の大鳳寺の改修に連動する瓦を共有することからすれば、大鳳寺中心伽藍の存続と伴に歩んだ施設であることは間違いない。

## B. 大鳳寺西外区の廃絶と耕地化

**大鳳寺の終焉** 仁平二年（1152）三月日付の『東寺文書』「東寺御影供菓子支配状」に載る「大鳳寺」がこの菟道西中に所在する寺院遺跡のことであるとすれば、文献上、12世紀中葉段階で大鳳寺は存続していることとなる。この記録と当該遺跡との関係はここでは触れないが、遺構・遺物の上からは、10世紀中葉にはほぼ大鳳寺は終焉<sup>13</sup>を迎えていた状況が推測できる。

<sup>13</sup> 杉本宏「土器からみた大鳳寺跡の終焉」『京都考古』第34号 1984.

**耕地化** 西外区部分でも同様に10世紀以降に想定される建物跡の検出はなく、日常的な土器類が包含された土坑や小規模な柱穴が散在的に確認された程度である。中世期の土器では12世紀後半から15世紀にかけてのものが認められる。すなわち西外区の廃絶も、大鳳寺中心伽藍の終焉と機を一にしていることは間違いないと考えられる。廃絶後の土地利用について明確な証拠があるわけではないが、おそらく付近に散乱していたであろう廃瓦が集められ瓦溜りS X204が形成されたことや、土坑や小規模な柱穴が散在的に存在することから、耕地として利用されていったのではないかと考えられる。その時期は、出土量が少ないながらも土器を目安にすれば、12世紀後半ころということになろう。その後、当地の耕地利用は近世も継続され、基本的には昭和のグラウンド造成まで続いたのである。

#### C. おわりに

今回の発掘調査は、開発事業者である敷島住宅株式会社の全面的なご協力の中で、スムースに発掘運営ができ、文化財保護法により求められた当該開発に伴う記録作成のための発掘調査を終えることができた。

発掘調査の成果については、ここで繰り返すまでもなく、古代宇治の重要遺跡の一つである大鳳寺跡の付属施設を確認することができ、大きな成果を挙げることができた。また、この開発に伴っては部分的に旧地形を失う箇所が存在するが、造成計画からすれば全体としては造成面下に地形が保存される状況となっている。今までではグラウンドとして遺跡が存在する旧地形が地下に伝えられてきたが、今後は住宅地の地下に伝えられていくこととなる。

本市教育委員会としては、今回の発掘成果のみならず、これからも蓄積され続けるであろう地域の歴史情報を発掘報告書だけに留めることなく、機会を得ながら広く発信し、本市が持つ豊かな歴史の積極的な活用と文化財保護に関する理解をますますいただけるように、不断に努力を続けて行きたい。

最後に、この発掘調査の実施と報告書の作成に関してご理解とご協力をいただいた敷島住宅株式会社をはじめ、関係各位に対して衷心より感謝申し上げ、本報告書の結びとする。

Tab.4 Aトレント検出遺構一覧表

番号	略号	性格	地区	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
1	S D	溝	a~f・x ~z/1	2	30↑	0.45	褐色土	須恵器大甕片・瓶 片・杯片、重弧文 軒平瓦、瓦片、整 理箱1	飛鳥後 期・奈良	旧SP。西へ流下。3%勾配。 真西より南へ1度偏す。
2	S K	土坑	a/1	0.8↑	1.15	0.15	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。
3	S K	土坑	b/1	0.7↑	0.95	0.08	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。
4	P	柱穴	a/1	0.7	0.8	0.44	褐色土	須恵器杯小片	奈良	旧SP。
5	S K	土坑	c・d/1	0.6	1	0.08	褐色土			旧SP。
6	P	柱穴	d/2	0.9↑	0.95	0.14	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。 SB201柱穴。
7	P	柱穴	c/2・3	1.1	1	0.16	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。
8	P	柱穴	d・e/2・3	135	1.3	0.3	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。 SB200柱穴。
9	P	柱穴	e/2	0.3		0.06	褐色土			旧SP。
10	P	柱穴	f/2・3	1.5	1.1	0.25	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。 SB200柱穴。
11	P	柱穴	d/3	0.65		0.26	褐色土			旧SP。SB201柱穴。
12	P	柱穴	e/3	0.9↑	1.05	0.3	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。
13	P	柱穴	e・f/3	1.3		0.04	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。 SB202柱穴。
14	P	柱穴	f/3	0.65↑	1.1↑	0.25	褐色土			グラウンド暗渠で破損。旧SP。 SB201柱穴。
15	欠番	消滅	b/4							土色の部分変化。
16	S K	土坑	b/4	0.7	1	0.12	褐色土			旧SP。SX206より新。
17	S K	土坑	b/4	0.7	0.95	0.08	褐色土			旧SP。SX206より新。
18	欠番	消滅	b/4							土色の部分変化。
19	P	柱穴	a/4	0.3		0.17	褐色土	近世陶磁器破片	近世	旧SP。
20	欠番	消滅	d/3							土色の部分変化。
21	P	柱穴	d・e/4	0.7	0.8	0.25	褐色土			旧SP。SB200柱穴。
22	P	柱穴	e/3	0.9		0.31	褐色土			旧SP。
23	S K	土坑	e・f/3・ 4	1.2	1.6	0.24	褐色土	須恵器杯蓋小片、 土師器小片、川原 寺式軒丸瓦、重弧 文軒平瓦、鬼瓦、 瓦片、整理箱半分	奈良	旧SP。
24	P	柱穴	f/4	0.9		0.2	褐色土			旧SP。SB200柱穴。
25	P	柱穴	f/4	0.3		0.27	褐色土			旧SP。SK30より新。

番号	略号	性格	地区	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
26	P	柱穴	e・f/4	0.8	1.05	0.15	褐色土			旧SP。SB202柱穴。
27	P	柱穴	e/4	0.4		0.13	褐色土			旧SP。
28	P	柱穴	d・e/4	0.6	0.85	0.12	褐色土			旧SP。SB201柱穴。
29	S K	土坑	e/4	0.6	0.9	0.1	褐色土			旧SP。
30	S K	土坑	f/4	2	1.95	0.57	褐色土	羽釜小片	中世	
31	P	柱穴	d・e/5	1.1	0.9	0.41	褐色土			旧SP。SB200柱穴。
32	P	柱穴	e・f/5	1.42	1.28	0.48	褐色土			旧SP。SB202柱穴。
33	P	柱穴	f/4・5	1.05	1.25	0.42	褐色土	土師器小片	奈良	旧SP。
34	S K	土坑	c・d/5	0.8	0.72	0.1	褐色土			
35	欠番	消滅	d/5	0.8						SK39に包含。
36	S K	土坑	d/5	1.2	1.45	0.07	褐色土			
37	P	柱穴	d・e/5・6	1.15	0.9	0.23	褐色土			旧SP。SB201柱穴。
38	P	柱穴	f/5・6	1.1↑	0.3↑		褐色土			旧SP。SB201柱穴。攪乱により破損。
39	S K	土坑	c・d/5・6	3.2	3.35	0.31	灰褐色土	かわらけ片、瓦質 羽釜片、龍泉系青 磁碗片、白磁皿IX 類片、瓦片など	13世紀	
40	P	柱穴	d/6	0.45		0.06	褐色土			旧SP。
41	S K	土坑	d/6	0.4	0.25	0.06	褐色土			旧SP。
42	P	柱穴	d/6	0.45		0.41	褐色土			旧SP。
43	S K	土坑	d/6	0.5	0.38	0.09	褐色土	須恵器片、土師器 小片、瓦片少量	奈良	旧SP。
44	P	柱穴	d/6	0.92	1.04	0.35	褐色土			旧SP。
45	P	柱穴	d/6	0.35		0.11	褐色土			旧SP。
46	P	柱穴	d・e/6	1.8	1.24	0.25	褐色土			旧SP。SB200柱穴。
47	S K	土坑	e/6	1.85	2.33	0.19	褐色土	かわらけ片、白磁 碗IV類片、須恵器 壺片、瓦片少量	中世、 12世紀	旧SK。不定形。
48	欠番	消滅	e/6							旧SK。SK47に包含。
49	欠番	消滅	e/6							旧SK。SK47に包含。
50	P	柱穴	f/6	0.75	0.88	0.21	褐色土			旧SK。SB202柱穴。
51	P	柱穴	f/6	1.25	1.25	0.44	褐色土	土師器小片	奈良	旧SK。SB200柱穴。
52	P	柱穴	e/6	0.8	0.65	0.39	褐色土			旧SK。SA203柱穴。
53	P	柱穴	e/6	0.2		0.04	褐色土			旧SK。

番号	略号	性格	地区	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
54	欠番	消滅	e/6	0.4						SK47に包含。
55	P	柱穴	e/6	1.25	1.1	0.21	褐色土			旧SK。SK47より古か。 SA203柱穴。
56	欠番	消滅	e/6	0.4						土色の部分変化。
57	欠番	消滅	e/6	0.4						土色の部分変化。
58	S K	土坑	e/6・7	1		0.07	褐色土			
59	P	柱穴	c/6	1.1	1.35	0.15	褐色土	土師器小片	奈良	旧SK。SA203柱穴。
60	P	柱穴	c・d/6	0.6	0.8	0.16	褐色土			旧SP。
61	P	柱穴	d/6	0.8	0.8	0.33	褐色土			旧SP。SA203柱穴。
62	P	柱穴	d/6	0.3		0.05	褐色土			旧SP。
63	P	柱穴	d/6	1.35	0.95	0.21	褐色土			旧SP。SA203柱穴。
64	P	柱穴	e/7	1.32	1.05	0.28	褐色土			旧SP。
65	P	柱穴	a/7	0.25		0.2	褐色土			旧SP。
66	S K	土坑	a/7・8	3	2.2↑	0.26	褐色土			旧SX。不定形。搅乱により 破損。
67	S K	土坑	c/7・8	4.5	0.6	0.09	褐色土			旧SX。
68	P	柱穴	c/8	0.44		0.06	褐色土			旧SP。
69	P	柱穴	c/8	0.6		0.05	褐色土			旧SP。
70	S K	土坑	d/7・8	1.4	0.6	0.09	褐色土			旧SP。
71	P	柱穴	d/8	0.5		0.06	褐色土			旧SP。
72	P	柱穴	d/7・8	0.5	0.6	0.05	褐色土			旧SP。
73	S K	土坑	d/8	0.95	0.8	0.11	褐色土			旧SP。
74	P	柱穴	e/8	0.45		0.05	褐色土			旧SP。
75	P	柱穴	e/8	0.45	0.5	0.05	褐色土			旧SP。
76	P	柱穴	e/8	0.35		0.3	褐色土			旧SP。
77	P	柱穴	e/8	0.3		0.1	褐色土			旧SP。
78	S K	土坑	e・f/8	2.18	1.85↑	0.21	黒褐色土	須恵器大甕片、土 師器片	奈良	
79	欠番	消滅	f/9	0.5						土色の部分変化。
80	欠番	消滅	e/9	0.2						土色の部分変化。
81	S D	溝	a～e・ z/9	0.8	21.7↑	0.23	灰褐色土	須恵器破片少量、 近世陶磁器片、瓦 片など整理箱半分	近世	西へ流下。3.2%勾配。真西 より南へ1度偏す。
82	P	柱穴	d/9	0.2		0.07	褐色土			旧SP。
83	欠番	消滅	b/9	0.6						土色の部分変化。

番号	略号	性格	地区	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
84	P	柱穴	b/9	0.55		0.05	褐色土		近世	旧SP。SD81より新。
85	P	柱穴	a/10	0.3		0.05	褐色土			旧SP。
86	P	柱穴	a/10	0.35		0.02	褐色土			旧SP。
87	P	柱穴	b/9	0.4		0.08	褐色土			旧SP。
88	S K	土坑	b/9・10	1.2	1.25	0.09	褐色土	かわらけ細片	中世	旧SP。
89	S K	土坑	b/9・10	1.65	1.86	0.06	褐色土	土師器高杯脚片		旧SP。
90	P	柱穴	b/10	0.3		0.09	褐色土			旧SP。
91	S K	土坑	b・c/10	1.5	2	0.09	褐色土	土師器小型壺1個体 分破片、須恵器小片	奈良	
92	P	柱穴	c/10	0.5		0.11	褐色土	土師器片	奈良	旧SP。
93	P	柱穴	d/10	0.3		0.08	褐色土	土師器細片		旧SP。
94	P	柱穴	d/10	0.25		0.1	褐色土	羽釜小片	中世	旧SP。
95	P	柱穴	d/10	0.3		0.07	褐色土			旧SP。
96	P	柱穴	d/10	0.25		0.03	褐色土			旧SP。
97	S K	土坑	a・z/10	2	0.55↑	0.3	褐色土			
98	S K	土坑	z/11	1.7	0.4↑	0.24	褐色土			
99	S K	土坑	a・z/11	0.8	0.65	0.19	褐色土	かわらけ片、瓦器 鍋片、羽釜片、重 弧文軒平瓦、瓦片 数袋	13世紀	
100	S K	土坑	a/10・ 11	2	2.05	0.22	暗褐色土	かわらけ片、大和型 瓦器碗片、瓦器羽釜 片、東播系片口鉢、 白磁片、須恵器片、 川原寺式軒丸瓦、瓦 片、整理箱1	12世紀 後半	中に柱穴。同一か否か不明。
101	P	柱穴	d/9	0.4		0.07	褐色土			旧SP。
102	S K	土坑	e・f/12	1.65	2	0.11	褐色土	陶磁器片	近世	深掘りで一部破損。
103	P	柱穴	c/4	1.3	1.33	0.42	褐色土			旧SP。
104	P	柱穴	c/5	1.2	1.2	0.36	褐色土	重弧文軒平瓦、瓦 片整理箱半分		旧SP。
105	P	柱穴	c/5	1.3	1.5	0.25	褐色土			旧SP。
106	P	柱穴	d/8	0.7	0.6	0.05	褐色土	瓦片少量		旧SK。
107	S K	土坑	d/8	0.88	0.98	0.08	褐色土			
108	S K	土坑	d・e/8	0.98	1.5	0.22	褐色土	かわらけ細片、羽 釜片、須恵器片、 青磁碗片、龍泉系 青磁水差片、瓦片、 数袋	13世紀	

番号	略号	性格	地区	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
109	S D	溝	a・b/3 ~5	0.6~1	15↑	0.2	褐色土	須恵器杯身片など 少量	奈良	旧SD106。P106と番号が重複のため新番号付与。SX205・206より古。
110	P	柱穴	d/5	0.5		0.08	褐色土			調査時番号漏れ。
111	P	柱穴	d/5	0.4		0.09	褐色土			調査時番号漏れ。
112	P	柱穴	d/6	0.2		0.06	褐色土			調査時番号漏れ。P 43より新。
113	P	柱穴	a/7	0.28		0.16	褐色土			調査時番号漏れ。
114	P	柱穴	d/9	0.3		0.16	褐色土			調査時番号漏れ。
200	S B	建物	d・e・ f/2~6		6.1	14.27			奈良	SP08・10・21・24・31・ 46・51で構成される南北棟の 掘立柱建物。
201	S B	建物	d・e・ f/2~6		6.46	14.09			奈良	SP06・11・14・28・37・38で 構成される南北棟の掘立柱建物。 SB200との新旧関係不明。
202	S B	建物	e/3~5	12.68					奈良	SP13・26・32・50で構成される 掘立柱建物。東西棟か。
203	S A	柵	c・d・ e/6						奈良	SP13・26・32・50で構成される 掘立柱建物。東西棟か。
204	S X	瓦溜り	z・a・ b/2~6		12	15.1	0.15	褐色土 川原寺式軒丸瓦、 重弧文軒平瓦、平 瓦、丸瓦、土師器	中世	調査時は地区名付記による瓦 溜りで表記。
205	S X	区画	a・b/3 ~5		2.6	8.4	0.15	褐色土 平瓦	中世	調査時は地区名付記による瓦 溜りで表記。瓦溜りSX204と一 体的。

Tab.5 B トレンチ検出遺構一覧表

番号	略号	性格	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
1	P	柱穴	0.3			褐色土			旧SP1。掘削中消滅。
2	P	柱穴	0.4		0.16	褐色土			旧SP2。
3	P	柱穴	0.48		0.24	褐色土	須恵器平瓶片他	奈良	旧SP3。
4	P	柱穴	0.6		0.15	褐色土			旧SP5。柱径0.18
5	P	柱穴	0.6		0.31	褐色土	須恵器片少量		旧SP4。
6	S K	土坑	0.6	0.75	0.2	褐色土、焼土・炭混じり			旧SK2。
7	S K	土坑	0.98	0.64	0.28	褐色土、焼土・炭混じり	須恵器甕片少量		旧SK3。
8	P	柱穴	0.62		0.14				調査時番号漏れ。
9	S K	土坑	0.92	1.22	0.25	褐色土、焼土・炭混じり			旧SK4。方形焼土坑
10	P	柱穴	0.32		0.14	褐色土	土師器甕片、瓦器碗片	13世紀後半	旧SP6。
11	P	柱穴	0.3		0.09	褐色土			旧SP7。
12	S K	土坑	0.64	0.94	0.18	灰褐色土		中世	旧SP5。
13	P	柱穴				灰褐色土		中世	旧SP8、壁中。
14	P	柱穴	0.45		0.19	灰褐色土		中世	旧SP9。
15	P	柱穴	0.5↑		0.04	灰褐色土		中世	旧SP10。
16	P	柱穴	0.4		0.35	灰褐色土		中世	旧SP11。SK17より新。
17	S K	土坑	0.7	1.05	0.1	褐色土、10cm程の礫混入	須恵器甕片、土師器甕片少量、古墳後期須恵器杯・ハソウ片	奈良	旧SK6。
18	S K	土坑	1.18	1.12	0.3	淡褐色土	須恵器甕片、土師器甕片、少量	奈良	旧SK7。
19	P	柱穴	0.6		0.11	灰褐色土	土師器甕片少量		旧SP12。
20	P	柱穴	0.38		0.07	灰褐色土		中世	旧SP13。

番号	略号	性格	幅もしくは径(m)	長さ(m)	深さ(m)	埋土	主要遺物	時代	備考
21	S X	瓦溜り	4	9	0.3	淡褐色土	弥生壺底部片、須恵器甕・杯・壺片、土師器甕片、整理箱半分、瓦類整理箱8	奈良	旧SX01。
22	S K	土坑	2.5	2	0.3	淡褐色土	須恵器杯・甕片、土師器甕片、重弧文軒平瓦、瓦片他、整理箱3	奈良	旧SK01。SX21より新。掘削時SX21に含む。壁面で別遺構確認。

Tab.6 報告書掲載遺物一覧表

番号	図面 図版	写真 図版	種別	種類	型式他	口径 (cm) (タテ)	器高 (cm) (ヨコ)	残存度	トレンチ	出土 遺構	地区	実測 番号	墨入れ	備考
1	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	17	15.4	瓦当80%	A	SX204	a/10・11	No.1	A区 SK100 041011	軒丸最優品
2	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	17.2	16	瓦当80%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.12	A区 b-3 瓦溜 041022	范傷多し・磨滅 激しい
3	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	7.8	5	瓦当15%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.5	A区 a-4 瓦溜 041018	
4	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM06	4.8	5.4	瓦当10%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.10	A区 b-3 瓦溜 041016	茶褐色
5	PL.7		瓦	軒丸瓦	NM01	2.2	6.6	瓦当5%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.11	A区 b-3 瓦溜 041016	
6	PL.7		瓦	軒丸瓦	NM01	2.6	6.8	瓦当5%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.7	A区 a-5 瓦溜 041016	
7	PL.7		瓦	軒丸瓦	NM01	2.4	6.2	瓦当5%	A			No.3	A区 暗キヨ中 040917	SX204だろう
8	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	6.4	5.4	瓦当10%	A	SK23	e.f/3.4	No.14	A区 1-4 SP23	范傷多し
9	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	7.6	4.8	瓦当10%	A			No.2	A区 暗キヨ中 040917	SX204だろう
10	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	7.8	6.8	瓦当10%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.9	A区 6-2 瓦溜 041018	范傷多し
11	PL.7		瓦	軒丸瓦	NM01	7	5.4	瓦当10%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.8	A区 a-5 瓦溜 041016	
12	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	7.2	8	瓦当10%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.13	A区 b-4 瓦溜 041022	范傷多し
13	PL.7	PL.47	瓦	軒丸瓦	NM01	6.2	10.8	瓦当15%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.6	A区 a-4 瓦溜 041022	
14	PL.7	PL.48	瓦	鬼瓦	OG03	21.2	13.8	瓦当35%	A	SK23	e.f/3.4	No.15	A区 f -4 SP23 041011	
15	PL.8	PL.48	瓦	軒平瓦	NHO1Ab	41.4	36.2	60%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.42	A区 a-5 瓦溜 041022	平瓦HAc、分割 界線
16	PL.9	PL.49	瓦	軒平瓦	NHO1Ac	20	18.4	30%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.44	A区 b-3 瓦溜 041022	平瓦HAA
17	PL.9	PL.49	瓦	軒平瓦	NHO1Aa	27.2	20.4	40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.47	A区 b-3 瓦溜 041016	平瓦HAc
18	PL.9		瓦	軒平瓦	NHO1Aa	16.4	32.2	瓦当100%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.16	A区 拡張部6 瓦 溜 041022	軒平最優品、分 割界線
19	PL.10		瓦	軒平瓦	NHO1Ab	22.6	33.2	40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.17	A区 拡張部6 瓦溜 041022	平瓦HAc
20	PL.10	PL.51	瓦	軒平瓦	NHO1Aa	22	13.8	30%	A			No.21	A区 暗キヨ中 040916	平瓦HAc、SX 204だろう
21	PL.10	PL.49	瓦	軒平瓦	NHO1Aa	20.4	18	30%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.41	A区 b-3 瓦溜 041022	平瓦Hac
22	PL.11	PL.51	瓦	軒平瓦	NHO1Ab	4	9.6	瓦当40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.57	A区 b-4 瓦溜 041016	
23	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ae	5	13.8	瓦当40%	A	SD01	a~f.x~z/1	No.20	A区 SD-01 041016	

番号	図面 図版	写真 図版	種別	種類	型式他	口径 (cm) (タテ)	器高 (cm) (ヨコ)	残存度	トレ ンチ	出土 遺構	地区	実測 番号	墨入れ	備考
24	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ae	4	15.8	瓦当40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.34	A区 a-5 瓦溜 041016	
25	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ab	4.4	12	瓦当40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.35	A区 a-6 瓦溜 041022	
26	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Aa	4.4	16.4	瓦当30%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.19	A区 拡張部6 瓦溜 041022	
27	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Aa	4.2	10.2	瓦当30%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.29	A区 a-5 瓦溜 041018	
28	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Aa	4	9.8	瓦当20%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.31	A区 a-5 瓦溜 041016	
29	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Aa	3.8	10.2	瓦当20%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.26	A区 a-4 瓦溜 041022	
30	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1A	1	7.8	瓦当5%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.28	A区 a-4 瓦溜 041014	
31	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ae	2.2	7	瓦当10%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.54	A区 b-4 瓦溜 041022	
32	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1A	2.4	10.8	瓦当5%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.37	A区 a-3 瓦溜 041022	
33	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ab	2.2	5.8	瓦当5%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.23	A区 a-2 瓦溜 041018	
34	PL.11	PL.51	瓦	軒平瓦	NHO1Ad	3.6	18	瓦当50%	A	SK100	a/10・11	No.39	A区 a-11 5K100 041011	
35	PL.11		瓦	軒平瓦	NHO1Ae	4.2	15.2	瓦当40%	A	SP23	f /4	No.33	A区 f-4 SP23 041013(2つ表示あり)	
36	PL.12	PL.51	瓦	丸瓦	MA	15.6	15.8	20%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.120	A区 a-5 瓦溜 041016	
37	PL.12	PL.51	瓦	丸瓦	MA	14.6	22.4	20%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.119	A区 a-5 瓦溜 041016	
38	PL.12	PL.51	瓦	丸瓦	MA	19.8	26.4	30%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.118	A区 a-6 瓦溜 041022	
39	PL.13	PL.52	瓦	平瓦	HAb	35.4	30	40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.93	A区 b-4 瓦溜 041027	分割界線
40	PL.14		瓦	平瓦	HAc	40	32.8	50%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.95	A区 b-3 瓦溜 041016	
41	PL.15		瓦	平瓦	HAb	41.8	34	80%	A	SX205	a.b/3~5	No.92	A区 c-5 掘方 瓦溜 041022	墨入間違い
42	PL.16		瓦	平瓦	HAc	38.4	17.6	50%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.103	A区 a-4 瓦溜 041014	
43	PL.16	PL.52	瓦	平瓦	HAc	40.2	22.6	60%	A	SP104	c/5	No.113	A区 c-5 SP104 堀方 041022	
44	PL.17		瓦	平瓦	HAb	26.8	17.4	30%	A	P106	d/8	No.100	A区 SD106 041022	
45	PL.17		瓦	平瓦	HAc	20.8	18.8	30%	A	SX204	a /4	No.98	A区 a-4 瓦溜 041018	
46	PL.17		瓦	平瓦	HAc	22.6	21.6	40%	A	SX204	b /3	No.107	A区 b-3 瓦溜 041016	破面

番号	図面 図版	写真 図版	種別	種類	型式他	口径 (cm) (タテ)	器高 (cm) (ヨコ)	残存度	トレンチ	出土 遺構	地区	実測 番号	墨入れ	備考
47	PL.18	PL.53	瓦	平瓦	HBb	13.4	23	20%	A	P104	c/5	No.101	A区 c-5 SP104 堀方 瓦溜	
48	PL.18	PL.53	瓦	平瓦	HAa	16	18.4	20%	A	SD01	a~f.x~z/1	No.91	A区 SD01 041013	分割界線
49	PL.18		瓦	平瓦	HAab	40	24.4	40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.89	A区 b-3 041022	2種の叩き原体
50	PL.19	PL.53	瓦	平瓦	HBa	21.2	17.2	20%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.84	A区 a-5 瓦溜 041022	
51	PL.19		瓦	平瓦	HBa	38.8	20.8	40%	A	SX204	z.a.b/2~6	No.83	A区 拡張部 6 瓦溜 041022	
52	PL.20	PL.50	瓦	軒平瓦	NHO1Ab	41.8	17.4	40%	B	SX21	y.z/22	No.63	B区-b 瓦溜 041011	平瓦HAc、分割 界線、粘土板接 合痕
53	PL.21	PL.50	瓦	軒平瓦	NHO1Ab	29.8	36.8	30%	B	SK22	y/22	No.62	B区-b 瓦溜 041011	平瓦HAc、破面
54	PL.22	PL.53	瓦	平瓦	HAa	24	15	40%	B	SX21	y.z/22	No.90	B区-b 西より55m 5X01 040809	
55	PL.22		瓦	平瓦	HAb	27	21	30%	B	SX21	y.z/22	No.117	B区-b SX01 040819	布綴じ合せ
56	PL.22		瓦	平瓦	HAc	20.6	24.8	30%	B	SX21	y.z/22	No.96	B区-b 瓦溜 041011	
57	PL.23		須恵器	壺		17.3	11↑	70%	A	SD1	a~f.x~z/1	No.007	A区 SD01 041017	7世紀後半
58	PL.23		青磁	碗		16.2		15%	A	SP108	e/8	No.012	ASP108 上層 041011 A区 SP e-8	龍泉窯系、机上 復元
59	PL.23		瓦器	鍋		21.4	7.5	20%	A	SP108	e/8	No.014	Aトレ SP 108 上層	
60	PL.23		瓦器	鍋		29	10.5	20%	A	精査中		No.008	Aトレ 040909	
61	PL.23		陶器	花瓶		5.2		60%	A	包含層		No.009	Aトレ a区 排 水暗キヨ	
62	PL.23		須恵器	ねり鉢		25.7	7.8	40%	A	SK100	a/10・11	No.011	ASK100 041011	
63	PL.23		須恵器	ねり鉢		24		20%	A	包含層		No.010	Aトレ 040910	
64	PL.23		土師器	釜		29.4		15%	A	SP108	e/8	No.013	Aトレ SP108 上り 041011	
65	PL.23		須恵器	杯蓋		10.9	4	30%	B	SK6	p/21	No.003	Bトレ SK6 040901	
66	PL.23		須恵器	杯蓋		11.2	2.8	30%	B	黒褐色 混礫土		No.002	褐色混レキ 040824	
67	PL.23		須恵器	杯身			2.5↑	15%	B	SK1		No.005	SK01 Bトレ	
68	PL.23		須恵器	杯身		11.2	3.5	45%	B	黒褐色 混礫土		No.001	Bトレ 暗褐色 040829	
69	PL.23		須恵器	杯		11	4	40%	B	盛土層		No.016	B-6盛土	

番号	図面 図版	写真 図版	種別	種類	型式他	口径 (cm) (タテ)	器高 (cm) (ヨコ)	残存度	トレンチ	出土 遺構	地区	実測 番号	墨入れ	備考
70	PL.23		須恵器	杯身		13	3.6	30%	B	地山上		No.006	Bトレ 西ヨリ 10m地上山上 040901	
71	PL.23		須恵器	杯		11.9	2.9	60%	B	盛土層		No.015	B=a 釜土B 040802	
72	PL.23		土師器	杯		13.2	2.8	30%	B	灰色混 礫土		No.017	B区-b 西より 23m 灰褐色混 礫土 040824	
73	PL.23		須恵器	ハソウ		復径 9.2	7.2↑	50%	B	SK6	p/21	No.004	B SK6 040901	
74	PL.23		石器	剥片		6	4	100%	B	遺構面		No.018	横長剥片 石核 B区-b 表採 040824	
75	PL.51	瓦	軒平瓦	NH01				瓦当15%	A			No.59	A区遺構検出中 040921	
76	PL.51	瓦	丸瓦	MA				30%	A	S K 204	b/3		A区 b3瓦溜 041016	
77	PL.51	瓦	丸瓦	MA				60%	B	盛土層			B区-b 西より 53m盛土層 040804	

## 抄 錄

ふりがな	とどういせき（とどうやぶさと14）はくつちょうさほうこくしょ							
書名	菟道遺跡（菟道藪里14）発掘調査報告書							
副書名	-大鳳寺跡西外区の発見-							
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第59集							
編著者名	杉本 宏							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行者	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	調査原因
菟道遺跡	宇治市菟道 藪里14	26204	108	34度 53分 55秒	135度 48分 45秒	040726 ～ 041022	1800m <sup>2</sup>	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
菟道遺跡	寺跡	飛鳥後期 奈良	大型掘立柱建物 3棟、区画溝1 条、瓦溜り2	川原寺式軒丸瓦、重弧文軒 平瓦、土師器、須恵器、 剥片	大鳳寺推定僧房			
成果要約	菟道遺跡は、宇治川谷口部右岸の菟道地区一帯に広がる集落遺跡で、古墳時代中期以降、室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。当該遺跡周囲には歴代首長墳や古代寺院の大鳳寺跡があり、古代における宇治の中心部と目される。今回の発掘調査は、その北端、大鳳寺西隣接地で行った。主体となる遺構は、区画用の素掘り溝と大型の掘立柱建物、多量の瓦類である。瓦は大和川原寺式を主体に奈良時代のものも含む。大鳳寺跡出土例と同范である。状況的には、大鳳寺中心寺域の西に接して区画された僧房などの寺院運営に關係する遺構と想定できる。地方寺院において、このような施設が発見されている事例は少なく重要である。							